徳島大学渭水会々報

第48号

発行／徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部同窓会

題字：田中　双鶴 氏

「吉野川源流モニュメント」

井下 俊作 氏

高知県本川村（現・いの町）の標高1,200m地点にモニュメントは設置されている。
手付かずの国有林に囲まれた青石の谷から吉野川は生まれ、194㎞の旅に出る。
生まれたての1滴の水はステンレス球で表わした。
その中央部分に四国地図がくり抜かれたモニュメントは緑豊かな原生林との
コントラストがひときわ存在感を見せている。

関連記事→P18

2019 年 10 月発行

主催／徳島大学 渭水会（総合科学部同窓会）　共催／徳島大学総合科学部

徳島大学創立70周年記念

HomeComingDay

ホームカミングデー

昭和24年（1949）に創立した徳島大学は、今年、創立70周年を迎えました。
記念行事の一環として、渭水会では初のホームカミングデーを開催します。
大学祭でにぎわう常三島キャンパスにどうぞお越しください。

日時

2019年 **11/2(土)**

13:30～　**オープニングセレモニー**

渭水会会員の音楽家を中心に特別編成した弦楽四重奏団
「ISUIカルテット」による記念演奏
演奏曲目：アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク

13:30～16:30
総合科学部キャンパスデジタルアーカイブ

場所

徳島大学総合科学部内　地域連携プラザ **常三島けやきホール**（2号館2階）

入場無料　※来場者に記念品贈呈

総合科学部キャンパス デジタルアーカイブ

懐かしい常三島キャンパスが今、よみがえる！
140年にわたるキャンパスの変遷をひもとく
貴重な写真・資料をデジタル化しました。
今昔写真の数々、現在のキャンパスの空撮動画も展示。
お誘い合わせてご来場ください。
写真を見ながら、青春時代の
思い出に花が咲くでしょう。

懐かしの学び舎
授業風景や学園祭
渭水寮……etc

同窓会 in 学食

ホームカミングデーの締めくくりは、大学の学食で同窓会はいかが？
美しく生まれ変わった学食は、パーティーも出来る設備が自慢です！

日　　時　2019年11月2日（土）●昼の部　12:00～14:00（受付11:30～）
●夜の部　17:30～19:30（受付17:00～）

場　　所　常三島食堂 Diningキララ

募集人数　昼の部、夜の部ともに定員150名（定員に達し次第、受付終了）

対　　象　渭水会会員の団体・グループが対象です。ゼミ、サークル、同級生や友人同士でグループを作って参加しませんか？　グループ・団体の代表者（幹事）がお申込ください。個人での参加は取り扱いません。

会　　費　おひとり 5,000円（税込、ビュッフェスタイル、2時間飲み放題付き）

お 申 込　代表者（幹事）がP53の申込書に記入の上、下記事務局まで**郵便、あるいはメールで**お申込みください。
なお、会費は10月21日（月）までに、代表者が渭水会の郵便振替口座に払込みください。
払込み後の返金は受け付けません。

渭水会事務局
〒770-8502　徳島市南常三島町1丁目1番地　徳島大学総合科学部内
TEL 088-656-7293　　携帯 090-2824-5006（事務局　大井）
E-mail　info@isuikai.jp

交通の案内とお願い

お車でご来場の方は、総合科学部駐車場（図書館南）をご利用ください。ただし、大学祭と共用のため、駐車場台数に限りがあります。なるべく公共交通機関でのご来場をお願いします。

目　次

徳島大学創立70周年記念　**ホームカミングデーのお知らせ**

会長ご挨拶　温故知新　渭水会会長　濱尾　巧久 …… 4

学部長ご挨拶　学部長（2期目）のご挨拶　総合科学部長　栗栖　聡 …… 5

特集　**総科のおたから【其ノ七】　特別編** …… 6

- 思い出のキャンパス・楽しかった渭水寮生活　西谷　靖 …… 8
- 土俵の思い出　三浦　武 …… 11
- 常三島今昔 …… 13

研究最前線⑦ こころの弱さを可視化する

総合科学部社会総合科学科心身健康コース　山本　哲也 …… 16

新連載①　**パターン認知の心理をめぐって**

- 明るさの錯覚について　徳島大学名誉教授　濱田　治良 …… 17

環境と彫刻　井下　俊作 …… 18

Topics　徳島大学狩猟サークル“Revier Jagt”

- 大学生による野生動物保全の可能性　総合科学部社会創生学科地域創生コース　内藤　直樹 …… 20
- 狩猟サークルを通じた出会いと学び　畑中　唯菜 …… 22

連載⑥　**私の職場**　**My Workplace**

- あすたむらんど徳島での仕事　矢野　陽子 …… 24

総科をたずねて②

- 教員を目指す仲間づくりを大切にして ～教員養成の現状～

徳島大学教職教育センター長　坂田　大輔 …… 26

- 生徒が輝く理科の授業を目指して　石丸　優貴 …… 27
- 誰にも負けない経験　松田　莉奈 …… 28

輝く新星⑤　～第5回渭水会会長賞～

- 世界1位を目指したものづくりから学んだこと　平田　晶子 …… 29
- 今やるべきことと、今やりたいこと　岸田　卓巳 …… 30
- 千里之行、始于足下　浅成　康汰 …… 31
- 北海道から感謝を込めて　森　篤志 …… 32
- 渭水会会長賞表彰要項 …… 33

エッセイ

- NIEの歩み　野口　幸司 …… 34
- 小学校体育連盟とともに　中江　英生 …… 35

助成事業

- 徳島大学書道部OB会総会・研修会　富久　和代 …… 36
- 教育課題研究会　奥村　兆男 …… 36

総科ニュース …… 38

徳大ニュース …… 40

事務局だより・編集後記 …… 41

ホームカミングデー　同窓会 in 学食 申込書 …… 42

渭水会会長
濱尾（はまお） 巧久（よしひさ）

温 故 知 新

日頃は「渭水会」の会員の皆様には会の発展のためにご尽力やご協力をいただきまして誠に有難うございます。先日の令和元年５月25日（土）に総会を開催し、平成30年度の事業報告・決算報告、更には令和元年度の事業計画・予算をご承認いただきました。

ところで、新聞、テレビで新元号の決定に至るまでの過程や新元号に託された意味等の報道がされ、新しい時代への期待が高まっているところであります。平成31年４月20日（土）のNHKのインタビューに万葉集研究の第一人者で国文学者の中西進先生が新元号の「令和」について、まず第一にすごくいい響きである。また「令」という字は「麗しい」という言葉にあたり、「乱れていない」「破綻がない」「整っている」。「和」は一人一人がそれぞれの価値を持ち、それを生かしながらみんな仲よしだ。日本は「和」というものを世界に訴える使命、ミッションがあると話されていました。

この新しい時代を迎えるにあたって改めて「温故知新」という言葉の重みを感じています。未来は現在の上に、現在は過去の上に成り立つものであります。

奇しくも、今年は徳島大学創立70周年を迎えるということで、来（きた）る11月２日（土）に大学としてのオープニングセレモニー、それに続いて各学部でホームカミングデーを開催します。渭水会としてもこの機会に大勢の会員の皆様に母校を訪ねていただいて旧交を温めると共に、大学や渭水会の活動にご理解いただければ幸いであります。

「温故知新」と云えば、この度、小学校３年生の子ども達の遠足のサポーターとしてお寺巡りをしました。16番札所観音寺から15番札所国分寺を歩き、それぞれのお寺の由来について話をしました。国分寺で「16番札所から15番札所と逆に歩くことを逆打ちといって、これを始めたのが伊予の国（現在の愛媛県）の豪農であった衛門三郎という人です」と話し終えると、一人の子どもに「衛門三郎の話はほんとうですか」と尋ねられ、私は一瞬答えに詰まりました。

乞食のようなみすぼらしい旅の僧が空海上人（しょうにん）であったことへの疑問なのか。許しを乞うために上人を尋ねて遍路の旅を続け遂に霊場を巡ること20度、21度目は逆の途をたどって焼山寺の近くで倒れた。その時に上人が現れたことへの不思議なのか。衛門三郎の生まれ変わりの話が本当なのか。子どもの疑問を十分に確かめることなしに「“人の身なりでその人を判断してはいけません”という戒めのためのお話です」と答えるのが精一杯でした。自分の知識がいかにあいまいであったのか。３年生の子どもの発達段階に沿うにはどのように話せばよかったのか。子どもの心に届く話をすることの難しさ、自分の不思議に思うことを尋ねられるすばらしい子どもが育っていることに改めて気付かされたものです。

その後、５月19日（日）に「第25回最後まで残った空海の道ウォーク」（藤井寺～焼山寺～鍋岩までの15.6㎞）に参加し、焼山寺から鍋岩への道の途中にある杖杉（じょうしん）庵を訪ねました。焼山寺保勝会の「杖杉庵縁起」によれば、「其の杖より葉を生かし大杉となった。故にこの庵を杖杉庵と呼ばれ、今尚、大師の遺跡として残っている」と記されています。

平成から令和と年号が代わり、新しい希望や夢が語られることが多くなっています。「温故知新」は故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る。我々の判断の基準は過去の経験や知識が基になっています。新しい「令和」の時代にそれが適応するのか、適応しないのか。空海の辿った道を辿りながらふと心に浮かんだ思いです。

（昭和40年　学芸学部４年制小学校課程卒）

学部長（２期目）のご挨拶

総合科学部長
栗栖（くりす）　聡（さとし）

渭水会会員の皆様には、常日頃様々な形で総合科学部の教育、研究、運営等をご支援いただき、誠にありがとうございます。

平成29年度、30年度と２年間学部長を務めさせていただきましたが、本年４月より引き続き学部長を務めさせていただくことになりました。これまでは、日常的業務への対応が中心でしたが、今後はそれに加えて、学部運営において多少なりとも独自性を発揮できればと考えております。そのためには、皆様のご理解とご支援が不可欠となりますので、今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

さて、総合科学部は、平成28年度（2016年度）から新しい学部として再出発いたしましたが、今年度は１年生から４年生まで全て新総合科学部の学生ということで、初めての卒業生を送り出すことになります。新総合科学部は、グローバル化する現代社会・地域社会の諸課題を的確に理解し、問題解決に携わることのできる実践的な人材を養成することを目指しており、専門教育科目に加え、「課題発見ゼミナール」、「総合科学実践講義」、「総合科学実践プロジェクト」などの「実践学習科目」を開講しています。また、現在27の提携大学等から選ぶことができる42の留学プログラムがあり、平成30年度には84名の学生が留学しております（うち74名奨学金利用）。

こうした教育の成果として、明確な問題意識を持ち、積極的に行動することができる学生が増えているように思います。よって、今年度卒業する皆さんは、これまで以上に卒業後各方面で活躍してくれるものと期待しております。

令和２年度には、今年度の卒業生が進学することになる大学院の設置が予定されています。総合科学部、理工学部、生物資源産業学部の上に「創成科学研究科（仮称）」という分野横断型の大学院修士課程を設置する予定です。総合科学部の卒業生は、グローバルな視点をもって地域課題を解決する人材を育成する「地域創成専攻（仮称）」、臨床心理士、公認心理師といった資格取得に向けた人材を育成する「臨床心理学専攻（仮称）」に進学することになります。現在は、設置認可申請を行っている段階ですので、審査結果を受けて、詳細な内容をお知らせすることになります。

このように、学部、大学院共に、時代の大きな流れや社会のニーズに対応して再編を行っているところですが、他方で、本年度は徳島大学創立70周年という長い伝統の中での節目の年となっています。11月２日（土）には、渭水会様が総合科学部内の地域連携プラザ等において、ホームカミングデーを予定されており、様々な記念事業が開催されるとお伺いしております。ぜひ多くの会員の皆様にご参加いただき、総合科学部の歴史を振り返ると共に、今現在の総合科学部をご覧になっていただければと思います。

大学の歴史もさることながら、明治７年（1874年）発足の徳島師範期成学校以来ということでいえば、総合科学部としては数年後に150周年を迎えることになります。明治以降の日本の近代化の歴史と共に、学部はその歩みを進めてきたということであり、総合科学部の歴史と伝統の重みに身の引き締まる思いがいたします。こうした歴史と伝統を継承しながら、学部・大学院共に今後も進化を続けていき、これからの時代にふさわしい人材を養成できればと考えております。今後とも皆様のご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

特集

総科のおたから

其ノ七
特別編

11月2日（土）、徳島大学創立70周年記念ホームカミングデーの催しとして、渭水会では「総合科学部キャンパスデジタルアーカイブ」を開催します。常三島キャンパスの古い写真、資料をデジタル化して保存するという研究をされている桑原恵、塚本章宏、佐原理の先生方にご協力いただき、貴重な写真が集まりました。本誌ではその一部をご紹介します。師範学校時代から140年にわたるキャンパスの変遷、お楽しみください。

空中撮影による昭和30年代のキャンパス全景。矢間愛雅教官が撮影したもの。木造の校舎が並んでいる。助任川には、上流から筏流しで運ばれてきた木材が浮かんでいる（1955年／学芸学部）

撮影年は不明だが、吉野川大橋がまだ架かっていないので（1968年着工）、昭和30年台後半〜40年代初期と思われる。校舎は木造から鉄筋へと移行しつつある。国道の位置に注目！

教育学部時代のキャンパス。国道192号や助任川沿線もほぼ現在と同じ。
プールやテニスコート、右手奥にはグラウンドも見える。

徳大学芸学部の残像

思い出のキャンパス・楽しかった渭水寮生活

西谷（にしたに）　靖（やすし）

昭和30年に入学したころは、まだ敗戦の面影が残っていて、衣食住は、十分とは言えない時代だった。卒業して半世紀余、今では旧大学構内は国道が突き抜け、プールや私たちが４年間生活した渭水寮などは、マンションや店舗に変わりその痕跡すら残っていない。しかも、わが身はいくらか認知症か記憶も遠のきつつある。大学の本質である学問の研究や活動の成果は、かなり薄れたが、学生ならではの楽しかった生活の様子が思い出してくる。幸いなことに卒業時に有志が発案して作成してくれたアルバムの中に当時の生活の記録が残されているので、それを頼りに断片的に思い出してみた。

城山よりキャンパスを望む
（1960年頃）

学芸学部の正門前で。
青年は若き日の筆者

学芸学部の旧キャンパス

●学部を守る土塁

学芸学部の構内を守るように、南側と西側に土手の上に板塀がある城のような構えだった。この城壁は若い我々でも簡単に越えられるものではなかった（寮生だった我々が夜間閉ざされた門を避けて乗り越え、寮に帰るにはかなりの技術と経験が必要だった）。なんでそのような堅固な土塁が必要だったのだろうか。前の施設は師範学校だったはずだが。

●正門のたたずまいと大掲示板

御影石（みかげいし）の門柱と観音開きの門扉、それに守衛舎は重厚なものだった。

正門を入ると赤榕（アコウ）の大木があった。これは北限の植生だと聞いていた。気根が生えていたのを覚えている。

その南に連絡用の掲示板があって、休講連絡などを調べるために必ず立ち寄っていた。

校舎西の
土手

学芸学部正門。アコウの大木が繁っている

木造の本館

戦後復興した渭水寮（1950-1960／学芸学部）

昭和５年当時の徳島県師範学校寄宿舎「渭水寮」
（1930／徳島県師範学校）

●木造本館

正面玄関を入ると左には、教務課や厚生課などの学部の中枢の事務室があった。東西に長くて暗い廊下の両脇に講義室や研究室がある巨大な建造物だった。これは、木造建築で日本一だともうわさされていた。建材は松茂航空隊の兵舎のものを使用したと聞いていた。冷暖房はもちろん無かった。

●南西通用門のユーカリノキ

助任橋からの通用門を入ると散髪屋さんがあって、よくお世話になっていた。その前に風になびく一本の大きな木があった。後で知ったことだが、記念植樹されたものだったそうだ。その木が大切に今の総合科学部１号館の中庭に移植されている。当時の学芸学部のただ一つの生き証人だ。

●蜂須賀公の土蔵

その北のプールの脇に漆喰造りの蔵がぽつんとあった。戦火に耐えて残っていてその中に蜂須賀藩主の宝物があると噂されていた。事実、貴重な芸術品があったと、近年に徳島城博物館の学芸員から聞いた。

渭水寮と寮生活

●寮舎

その北に４年間生活した渭水寮があり、１階が食堂と学生の部活室で、２階が寮の部屋だった。寮舎はまさに兵舎だった。普通の部屋には必要のない棚のようなものがあり、それが銃を立てる銃掛だったのだ。松茂の兵舎を移築したのだそうだ。急造だったのか板張りの壁で隙間がひどく、冬は北風が、おかまいなしに吹き込んできていた。

●夜食

夜な夜な、お腹がすくので、米を買ってきて火鉢の火力を利用して茶瓶でご飯を炊いたこともあった。次の日お茶を入れて湯呑に注ぐとご飯粒が出てきて大笑いしたことがあった。

夜食

渭水寮の仮装行列。テーマは「桃太郎の凱旋」

青鬼は右から２番目？

●大学祭

寮生会議で大学祭に参加することになった。昔話から「桃太郎の凱旋（がいせん）」だった。青鬼役だった私は、裸で青の絵の具を全身に塗った。寒かったこと、終了するとすぐ銭湯にとびこんで「寮生です」と告げると「よく洗って」と許してくれた。他の研究室の出し物には、その時代に流行のロカビリーなどがあった。

●医学進学コースの寮生

私が入寮した年には、学芸学部にこの課程があり、医学部への受験のため、一生懸命に勉強していた。全て県外からの学生で、その中の一人に奄美大島の寮生がいて、帰省のみやげに、特産黒糖の塊を寮生に配ってくれたことを思い出す。当時は珍品だった。

●食堂のおじさん

寮生に掛かってくる全ての電話は、おじさんが大声で面白く取り次いでくれていた。

●自治寮

寮生活は寮生会議で決定し、実践していた。大学からも認められていた。新入生歓迎会、渭水寮祭、送別会、寮生遠足（女子寮生勧誘）、歌声集会、避難訓練、風呂沸かし当番、会議室の清掃当番、突発行事など。学部の厚生課も研究室並みに、よく面倒を見てくれた。主要行事には、学部長が来賓として参列してくれ、祝辞をいただいていた。

先輩の誘いで、集団で日曜日早朝フォークダンスに参加したり、大学の部活動に加入したり、酒盛りをしたりと、縦系列が幅を利かせていたけれど、全てが楽しい生活だった。また、各学年、各研究室それに、県下各地からの寝食を共にする集団生活のため、多様な体験ができて、考え方、生き方に幅と深さが育ったと思う。

●渭水寮寮歌

眉山の緑春たけて　赤紫に夜は明けぬ
オリオン薄る朝空に　瞳を上げていざ立たん
見よ青春の風薫る　渭水の寮の朝ぼらけ

寮生は、行事や集会で、朝な夕なによく歌って士気と共通意識を高めたものだった。

角帽に詰襟の青春時代
映画の一シーンの様な思い出の数々
昭和は　遠くなりにけり

寮生遠足。
鳴門公園の
千畳敷で楽しく
フォークダンス

青春のひとかけら。海水浴場にて

（昭和34年　学芸学部４年制小学校養成課程卒（地理学教室））

土俵の思い出

三浦（みうら） 武（たけし）

私は東京オリンピック開催の前年、昭和38年に徳島大学学芸学部助手として着任しました。徳島は全く初めての地で、不安と期待が入り混じる心境のもと、東京駅から蒸気機関車が牽引する列車に揺られて岡山へ。その後、宇高連絡船で真っ暗な高松に到着しました。駅前の安宿に泊まり、翌朝高徳線で徳島へ向かいましたが、線路沿いの淋しさで徳島へ行きつけるのかと心配になったことを思い出します。無事徳島着。小さな駅舎に驚きましたが、到着の喜びで元気が出て、訪ねながら歩き大学に到着することが出来ました。

門衛さんに教わって体育研究室へ行き、当時の主任・天野教授にお会いできて、他の保健体育の先生方を紹介していただき、私の研究室にも案内していただきました。古びた木造平屋建ての一室でしたが、ここで勉強出来ると思うと「よし、頑張ろう」という気になりました。次に、学内にあった、私が生活することになる教員寮に行きました。６畳一間の部屋でしたが、ありがたかったです。後は自由にということで、学内見学に。やはり体育・スポーツ施設が気になり、近くの体育館から。鉄骨・木造建築の薄暗いながら天井の高い、バスケットボールコート二面の当時では立派なものでした。プールがあると聞いていましたので、通りすがりの学生に訪ねたら、案内してくれることになり、その途中に大きな木造二階建てがありましたので「この建物は」と聞きましたら「自分が生活している渭水寮という男子寮です」と教えてくれました。そのすぐそばに土俵がありました。四本柱屋根付きの土俵です。その瞬間、この大学が私にとって身近なものとなりました。

といいますのは、私の故郷は島根県浜田市という漁師町で、相撲が大変盛んで、春の花見、夏祭り、秋祭りには必ず相撲大会が開催され、見物と知り合いの選手の応援が、余り娯楽のない当時の私たちにとって、それは大きな喜びで待ち遠しいものでした。子供たちも遊びでその土俵に上がり、相撲を取りました。高等学校はスポーツの盛んな伝統校で、私は体操競技部専用の体育館で練習をしていました。

土俵

1970年代の教育学部・相撲集中講義にて。土俵は教育学部北棟と中棟の間にあった（1975-1980／教育学部）

テニスコートから
校舎を望む

テニスコートは戦災で焼失した地歴教室の跡地に作られた。後ろには木造校舎が見える。
右本館は海軍兵舎を移築したもの（1950-1960頃／学芸学部）

その体育館に隣接して相撲部の正式な土俵があり、卒業生と部員が練習に励んでいました。土俵は私にとって大変懐かしく思い出深いものだったからです。

そこから少し離れたところに、25メートルプール、それと並んでテニスコートが二面あることを確認してその日を終わりました。以後、プールとテニスコートには大変お世話になりました。

その何年後か思い出せないのですが、徳島市の都市計画に大学が協力したと聞いていますが、学内の道路や建築物、スポーツ施設の大幅な移動・移築・取り壊しが行われることに成りました。あまり使われていなかった土俵は、あきらめなくてはならないなと思っていましたが、移築されることになり喜んだことでした。

昭和40年頃の旧体育館でのダンス授業の１コマ

土俵は移築されて元の姿を取り戻しましたが、相撲部もなく、授業でも相撲はありませんでしたから宝の持ち腐れ状態でした。40年も前でしょうか、一回土俵を使おうという提案があり、夏休みの集中講義で相撲を開講することになり、講師は高知大学から、学生相撲で鳴らした前田教授をお招きすることになりました。早速、受講者全員で体育器具庫に保管されていた、まわし（締込み）を虫干しして当日に備えました。暑い最中に汗と砂まみれの相撲の実技講習が始まりました。指導者と受講者の真剣さを見ていて、涙が出て困ったことを思い出します。土俵も喜んでくれたことと思います。

その後、私の定年と共に土俵は姿を消したと勝手に思っています。

明治11年の徳島師範学校 第１回卒業記念寫眞
（1878／師範学校）

戦災前の女子師範学校の校舎全景（1942／徳島師範学校女子部）

木造二階建ての学芸学部本館。第二次世界大戦がはじまり、
写真は決戦下の自動車訓練の様子（1939／徳島県師範学校）

常三島今昔

明治7年（1876）5月1日、徳島師範期成学校開校より、師範学校、学芸学部、教育学部を経て、現在の総合科学部へ。140年余にわたるキャンパスの変遷を振り返ってみましょう。

戦後復興した木造本館。右手はるかに唯一の戦災を免れた正門横の門衛が見える
（1945-1955／徳島師範学校―徳島大学）

昭和28年～30年、教育学教室、
心理学教室をはじめ、多くの校舎が建築された。
写真は音楽教室の増築の様子
（1955／学芸学部）

入学式の後、
サークル勧誘合戦が
繰り広げられている
（1998／総合科学部）

豊かに繁る2号館前の欅並木。
学芸学部、教育学部、総合科学部を通じて、
キャンパスのシンボルとなっている
（1999／総合科学部）

昭和31年度卒業式。会場は講堂だろうか?
(1956／学芸学部)

教室風景。最前列の人は諦めて
睡魔に勝てず……(1949-1965／学芸学部)

講座のひとコマ。ピアノがあるこの部屋は
音楽教室だろうか?(1949-1965／学芸学部)

昭和14年頃の男子師範の購買室。昼食を購入する学生達は、
きっちりと詰襟を着ている(1939／徳島県師範学校)

学生会館横の食堂で昼食をとる学生達。
ちなみに、昭和29年(1954)当時は1食11円〜
(1949-1965／学芸学部)

学園生活

いつの時代にも、キャンパスには、勉学に、サークルに生き生きと勤しむ学生達の姿がありました。数十万の若人がこのキャンパスから巣立っていきました。

体育館全景。戦後、小松島市和田島にあった飛行機の格納庫を移築したものであった
(1953／学芸学部)

8月に行われた技能教科講習会の様子(1957／学芸学部)

体育の授業風景。男女仲良く
フォークダンス(1949-1965／学芸学部)

技能教科講習会・美術(1956／学芸学部)

体育の授業だろうか?グラウンドで野球を楽しむ。
後ろに見えるのはトイレ、その奥に音楽教室、
体育館を望む(1949-1965／学芸学部)

昭和31年度学芸学部入学挨拶会。
会場へいそぐ保護者(1956／学芸学部)

パン食い競争……ではなくタバコの火付け競争!?
今では考えられない風景（1956.10.28／学芸学部）

慎重に、でも急いで〜！
体操服に時代を感じる
（1956.10.28／学芸学部）

学校行事

さまざまな学校行事のなかでも、秋の学園祭は、今も昔も学生達が最も楽しみにしている行事ではないでしょうか。写真は昭和31年度の学芸学部体育大会の様子。当時は1週間にわたって、大学内外を会場に文化祭・体育大会が行われていました。

ゼミやサークルなどで趣向を凝らして
仮装行列が繰り広げられた（1956.10.28／学芸学部）

フォークダンスの大きな輪がグラウンドいっぱいに（1956.10.28／学芸学部）

洗心苑

同窓会館“洗心苑”は、昭和29年（1954）9月30日に、徳島大学創立80周年記念事業として建設されました。木造平屋建28.2坪、10畳、8畳、4畳半の茶室と管理室などがあり、当時の建築費は103万9,561円、設備費6万4,638円の立派な建物でした。

洗心苑全景。キャンパスの北端、現在の2号館の裏手あたりに立っていた
（1954.9／学芸学部）

樹木や石、つくばいなどを
配した趣ある日本庭園
（1954.9／学芸学部）

大広間には床の間もあった
（1954.9／学芸学部）

建築にあたっては、那賀郡新野町の瀬藤図義氏から寄贈された太龍寺周辺の杉の大木が使用され、建築費には、講談社第3代社長の野間左衛氏（明治35年師範卒）からの寄付金40万円と県内外の同窓会員からの寄付金が充てられました。

昭和64年（1989）12月に取り壊されるまで、長年にわたって、同窓会の会合や学部の作法室として、また華道部・茶道部の稽古などにも利用されました。

徳島大学創立70周年記念 ホームカミングデー

総合科学部キャンパス デジタルアーカイブ

入場料／無料　※来場者に記念品贈呈

特集でご紹介した写真はほんの一部。140年にわたる常三島キャンパスの貴重な写真、現在のキャンパスの空撮動画などを展示します。ぜひお誘い合わせの上、ご来場ください。

日時／ **2019年11月2日（土）13:30〜16:30**
※13:30〜 オープニングセレモニー
渭水会会員を中心に特別編成した **ISUIカルテット**による記念演奏

場所／ 徳島大学総合科学部内 地域連携プラザ「常三島けやきホール」

連載⑦ 研究最前線

第9回（令和元年度）総合科学優秀賞受賞者の先生にご寄稿いただきました

こころの弱さを可視化する

総合科学部 社会総合科学科 心身健康コース　山本（やまもと） 哲也（てつや）

私はこれまで、「こころ」を研究対象とし、特に抑うつや不適応行動をもたらす「脆弱性（こころの弱さ）」を可視化することを中心的な研究テーマとしてまいりました。本稿では、私が行ってきた研究をいくつか紹介しながら、脆弱性を可視化することの臨床的意義について考えてみたいと思います。

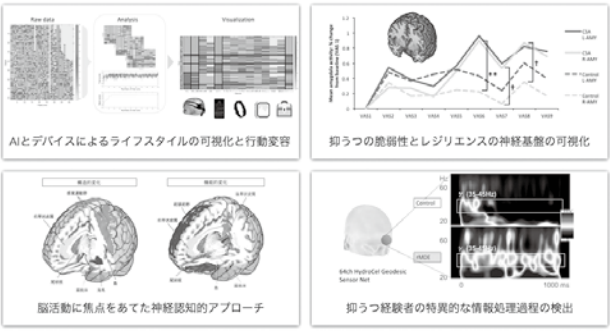


Figure 1. 筆者がこれまで行ってきた主な研究プロジェクト

抑うつをもたらす脆弱性

うつ病を経験するほど、その再発率は高くなっていくことが知られており、うつ病エピソードを3回以上経験した人々においては、90%以上の確率で再発することが報告されています。このことは、うつ病経験によって、うつ病をもたらしやすくする脆弱性が形成・増悪されるということを示唆しています。

そこで私たちの研究グループでは、うつ病経験者を対象にして、従来の実験心理学的手法に加え、神経心理検査、EEG（脳波計測）、fMRI（脳血流動態計測）などを活用した様々なアプローチに基づいて、脆弱性の検出を試みました。

その結果、まずうつ病経験者においては、特に高次の注意機能が低下しており、その傾向はうつ病の罹患期間が増すほど顕著であることが示されました（Yamamoto & Shimada, 2012）。また、ネガティブな気分を喚起したうつ病経験者に対して、情動語の判断を求めた際には、脳波のγ帯域に特異的な情報処理活動が認められることを見出しました（Yamamoto et al., 2018）。加えて、うつ病を反復的に経験するほど、ネガティブな出来事を繰り返し考える傾向（反すう）が強くなることや（山本他、2014）、呈示された単語が自分に関連しているかどうかを判断する際において、情動や自己制御に関わる脳領域間における機能的結合性（脳活動の同期の程度）が特異的であること（山本他、2018）が明らかになっています。

以上のような、うつ病経験と関連した心理的・生物的な特異性が、環境と相互作用することなどによって、抑うつの脆弱性となると考えられます。

こころの脆弱性を可視化することの意義

これまでの医学の歴史において、様々な病気が科学技術の進歩による「病因の可視化」によって克服されてきました。同様に、こころの脆弱性を様々な観点から可視化できることは、脆弱性が形成されたり、修正されるメカニズムを理解することにつながり、結果的に脆弱性によるリスクの低減が可能になるといえそうです。

たとえば、認知機能や情報処理、脳活動などの生物学的な脆弱性を理解することで、それらの直接的な改善を目的としたアプローチが開かれる可能性があります。すなわち、精神症状をもたらす脳領域の活動の調整を意図した神経認知的介入や、児童の認知機能の向上を意図した学校場面における教育的介入をはじめ、脆弱性の変容や問題の予防を目的とした様々な手法を提案することができます。こうした観点は、従来の心理学的アプローチにはない、新たな介入方法の創出に寄与すると考えられます。

このように、こころの脆弱性を可視化することは、私たちがこころを見つめ、克服できるようにすることにつながるといえるでしょう。近年では、脆弱性が有する良い面についても研究が進められており、脆弱性のさらなる理解が期待されます。

最後に、このたび徳島大学総合科学優秀賞を受賞できましたことを大変光栄に感じております。今回の受賞は、共同研究者の方々のみならず、素晴らしい研究環境をつくってくださっている同僚の先生方や学生の皆様、普段自分を支えてくれている家族など、周囲からいただいている多大なるサポートのおかげによるものだと感じております。今回の受賞を一層の励みとして、これからも着実に研究活動を続けていきたく思うと同時に、指導する学生ひとりひとりの資質を最大限に可視化・発現できるような教育活動を行えるよう精進してまいりたいと思います。

尾田 理左 氏
（平成26年絵画表現研究室卒）作

新連載①

パターン認知の心理をめぐって

明るさの錯覚について

徳島大学名誉教授　濱田（はまだ）　治良（じろう）

図（A）中央部には黒色グラデーションが描かれています。その光強度を図（B）で説明すると左に白色半円αがあり、その境界βで光強度が急激に下降し、右方向γまでは黒色陰影が薄らぎ、次に同じ光強度の平坦部δに戻っています。しかし、私たちが図（A）を見ると図（C）にあるように右平坦部δ'は白色半円α'より暗いと感じます。黒色陰影の影響が右方向に波及して右端全体を暗くしているのです。この明るさの錯覚は白色半円と黒色陰影の明暗の段差、すなわち輪郭β'を鮮明にする効果に伴って起こるのです。その結果、あたかも薄暗い夜空に月が煌々（こうこう）と照っているかのような錯覚が生じるのです。

これは二人の発見者にちなんでクライク・オブライエン錯視と呼ばれていて、その性質はかなり分かっています。たとえば、図（A）の白黒を反転させて図（a）を描くと同じ光強度であるにもかかわらず、左端に比べて右端が相対的に明るくなり明の錯視が生じます。しかし、心理学実験によると、この場合は右端δ'より左端α'が暗いのです。また黒色陰影による暗の錯視の方が黒色半円による明の錯視より強いことも分かっています。暗と明の錯視に共通することは、いずれも暗化効果によって起こることです。これらの研究は1982年と85年に北海道大学と徳島大学から世界に向けて発信されました。

この錯視が心理学の分野で発見されて約80年ですが、その歴史は長く芸術作品として千年以上も前に中国の磁器で濃淡をつけたことに遡ります。日本でも1900年頃（明治）に水墨画で満月を描写するためにこの錯視が考案されました。

一方、白色半円から少し遠い境界γおよび黒色半円から離れた境界γに注目して図（A）と（a）を観察すると、前者には明るい輪γ'が、後者には暗い輪γ'が出現しています。これは物理学者・哲学者・心理学者として活躍したE. マッハが1865年に発見した現象であり、マッハの輪と呼ばれています（彼の名は音速の単位にもなっている）。クライク・オブライエン錯視に伴って生ずるマッハの輪は、2010年に徳島大学で最初に発見されるまでは見過ごされていました。

ここに紹介した図には客観的にはあり得ない様々な興味深い心理学的現象が現れています。このことはパターン認知にとって輪郭が極めて重要であることを教えています。芸術の分野では遠い昔から利用されてきた錯視ですが、その発生メカニズムの解明には実験心理学だけでなく、情報科学・神経科学などの協力が不可欠なのです。

（昭和46年　教育学部小学校課程心理学教室卒）

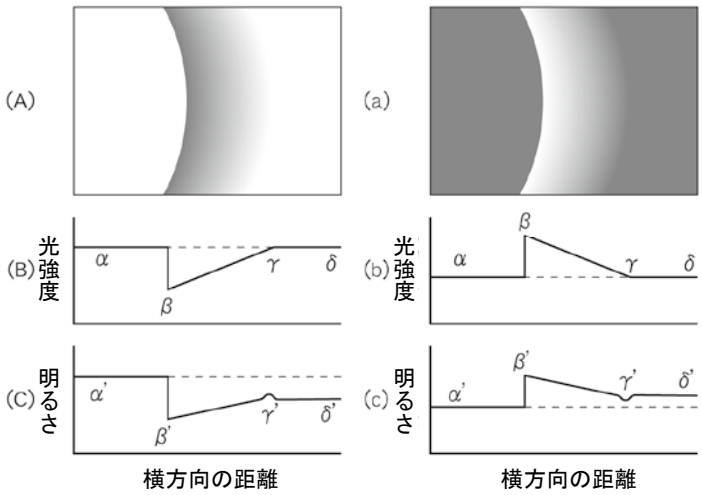


図 クレイク・オブライエン錯視とマッハの輪

環境と彫刻

井下（いのした） 俊作（しゅんさく）

私は在学中から徳島中央公園を会場に野外彫刻展に参加してきた。それは徳島彫刻集団というグループの一員として「彫刻は室内で展示するのではなく、大自然の野外でその存在を問うものだ」という坂東文夫教授の考え方に賛同し今日に至っている。

会の掲げるテーマ「環境と彫刻」は昨年の56回展まで続けてきた。

その意味は展示した環境の中で場違いに見えたり、存在感なく環境に埋没することを避け、自然を味方につけながら意図するメッセージを形に込めることが出来るかをテーマとしてきた。

今回、私がそのテーマを意識しながら取り組んできた３点の作品を紹介したい。

● １点目は平成元年に新町川水際公園に設置した「空の水族館」である。徳島市の中心部を流れる新町川が高度成長期にゴミの捨て場となり、メタンガスを発する悪臭の川と化していた。

川を本来の清らかな水の流れる姿に戻し市民が憩える場所にするため、徳島市が水際公園を作りシンボルモニュメントの募集となった。

それに応募した私のコンセプトは、魚が帰ってきて自由に泳ぐ姿を表現することであった。

だが魚をどう表現すればいいのか？ 陸上に上った魚はもはや生きてはいけない。そうだ、空中に水族館を作ればいいのだ！

実作では磨き上げた卵形の黒みかげ石４個からステンレスパイプが立ち上がり、その先端にステンレス製の魚29匹が泳いでいる。風が吹けばパイプの中に仕組んだベアリングで一斉に同じ方向に向く風見魚となる。さらに石の穴から勢いよく噴水が魚に当たり、煙幕で魚が水の中にいるようだ。夜には、ライトアップされたモニュメントは、まさに空の水族館となる。

「空の水族館」

● ２点目は1995年に設置した「吉野川源流モニュメント（表紙）」である。

源流とは「川の生まれる所、川の始まる所で１ヶ月間雨が降らなくても常に水が湧き出している所」という定義。その源流、高知県本川村（現･いの町）から流れ出し、途中愛媛県の銅山川が流れ込み、徳島県池田町から水不足の香川県に分水している。

「吉野川源流モニュメント」スケッチ

そして大河となり徳島平野を東進し、紀伊水道へ流れ込み194kmの旅を終える。源流が１滴の水から始まるということでステンレスのしずくを作り、その中央部に四国地図をくり抜いた造形がモニュメントとなった。

● ３点目は四国大学創立75周年記念モニュメント「啐啄（そったく）」である。

大学とは学生と教員で構成される教育機関であることを念頭に取り組んだ。そんな中、ふと高校の漢文の授業で習った啐啄ということばを思い出した。

禅宗で「啐」とは、雛鳥が卵の内側から声を出しながら殻を突っつくこと。「啄」とは、親鳥が卵の外から殻を突ついて雛の出るのを助けること。すなわち両者の呼吸がぴったり合うこと。それになぞらえ、仏教の修行において師弟の呼吸がぴったりと合って悟りの境地へ導くことをいう。

それを大学に当てはめると親鳥にあたる教員は、雛鳥にあたる学生を指導したり教えたりするのではなく、学生の能力を引き出したり助けるというメッセージとした。

モニュメントはキャンパス中央広場に４m直径の大理石ベースの上に２m長径の大理石の卵が横たわっている。卵の上部が破れ始め薄皮が姿を現し、その破片が床に落ちている。次の瞬間、雛が殻を破って生まれ出るだろう姿を表現した。

野外設置作品は自然の過酷な環境で永年耐えなければならないし、時代の変化で移動や廃棄を余儀なくされる運命にある。作者としては設置場所やメンテナンスを考慮しなくてはならない課題を背負うことになる。

（昭和40年　学芸学部中学校課程美術教室卒）

「啐啄」

Topics

徳島大学狩猟サークル “Revier Jagt”（レビア ヤークト）

猪鹿庁（岐阜）でのフィールドワーク

大学生による野生動物保全の可能性

徳島大学狩猟サークル“Revier Jagt”（レビア ヤークト）

総合科学部 社会創生学科 地域創生コース　内藤（ないとう） 直樹（なおき）

近年、さまざまな大学でハンター養成の授業や狩猟サークルが運営されている。徳島大学総合科学部内藤直樹研究室でも、2014年度から課外授業として狩猟免許（わな）講座と現地での狩猟講習を実施しており、2017年度には徳島県内初の狩猟サークル レビアヤークトを立ち上げた。レビア・ヤークトとはドイツ語で「猟区」を意味する。私たちは、このサークル活動を通じて狩猟や野生動物に関わるさまざまな人々が交流をする場をつくりたいと考えている。

全国の過疎地域において、野生動物によるさまざまな被害が問題になっている。また、これまで野生動物の保全・管理に携わってきたハンター人口の高齢化・減少も深刻化している。そうした過疎地域における野生動物と人間の間のせめぎあいの現場に、大学生たちが関わろうと考えるようになったきっかけは、授業の中で訪れた岐阜県の郡上八幡市を拠点とする猪鹿庁という企業での経験だった。猪鹿庁は農家による野生動物保全・管理の支援や狩猟の六次産業化等の事業をおこなうことを通じて、地域の自然環境をまもる新たな職業猟師の確立や狩猟を新たな文化やライフスタイルにすることを目的としている。そもそも鳥獣害問題は過疎問題とも強く関係しており、過疎問題の根本には雇用機会の問題がある。猪鹿庁には代表者の理念や実践に共感した地域外部の若者たちが働いており、鳥獣害対策と雇用機会の創出を成し遂げていた。学生たちはそのような猪鹿庁

の活動のなかに、これまでのハンターだけでなく地域住民や市民といった新たな人々が過疎地域における野生動物の保全・管理に参加する可能性を見た。この経験をきっかけに日本の過疎地域における人間と野生動物との関係に関する問題を「私たちも関与できる可能性があるし、そうする必要がある問題」として考えるようになった。

そこで授業で培った関心を継続的に探求する場として、2015年度から野生動物の保全・管理に関するビジネスの立ち上げをテーマにした課外授業を企画した。この課外授業では、徳島県や徳島県猟友会のご協力を得て、狩猟免許（わな）の取得に向けた講義と実習をおこなった。現在までに多くの学生が受講し、狩猟免許を取得している。そのうえで、狩猟免許を取得した学生たちで模擬ツアー会社を立ち上げ、狩猟をテーマにした観光商品を企画した。こうした活動を通じて、多くの学生が徳島の過疎地域における野生動物と人間の関係をめぐる問題に関心を持つとともに、地域の方々や地元行政のみなさんにも一定のご理解を得ることができた。

これらの活動に関わってきた学生の大学院進学をきっかけに、2017年７月に狩猟サークル レビアヤークトを立ち上げた。このサークルは、狩猟を通じた学生の学びや地域と交流の場づくりを目的としている。活動内容としては、①狩猟免許（わな）講座・実猟講座、②駆除事業への参加、③ジビエ商品の開発・販売である。レビアヤークトの活動を通じて、これまで狩猟の世界に関わってこなかった様々な人々が日本における野生動物と人間の関係の将来について考え、実践する機会を創り出すことが重要だと考えている。それゆえ活動目的も、スポーツハンティングのように動物を殺すこと自体にあるわけではない。私たちにとっての狩猟は、あくまでも環境や人間の暮らしをまもり、豊かにするために動物の命をいただくことである。それゆえ、いただいた命を可能な限り有効に利用する手段を考え、創り出すことも重要である。このサークルでは、駆除されたシカを活用したジビエソーセージの開発をおこなっており、2019年度内に一般販売をおこなう予定である。

日本の過疎地域における野生動物と人間との関係のゆくえを考えたとき、誰かが狩猟をはじめとする野生生物マネジメントを担ってゆく必要がある。にもかかわらず、私たち若者の多くは、それを「どこかの誰か」に任せたままでいる。いや、そもそも「任せている」という認識すら持っていないことが多いだろう。自然環境や地域の方々の生活をまもるために、時には増えすぎた動物を殺さなければならない場合もある。それは生易しいことでは無いが、それを「どこかの誰か」ではなく、まさに市民のひとりである自分たちの手で担っていくべきだと考えている。サークルは立ち上がったばかりだが、狩猟を通じて多くの人々が交流できる場の創出を目指して、狩猟や野生動物に関わる多様な人々とともに活動に取り組んでいきたい。

第一回 大学SDGs ACTION！AWARDS（朝日新聞社主催）の最終選考会

猪鹿庁（岐阜）でのフィールドワーク

狩猟サークルを通じた出会いと学び

大学院総合科学教育部 地域科学専攻1年　畑中 唯菜（はたなか ゆいな）

“Revier（レビア） Jagt（ヤークト）”は私が学部の３年生のときに発足されました。前期の終わりのころにゼミの先生である内藤直樹先生に呼ばれ、ゼミの先輩である高橋優子さんの卒業研究を兼ねて狩猟サークルを作ろうと思うのでその立ち上げの手伝いをしてほしいと言われました。当時の私は他のサークルでの活動が忙しかったので少し迷いましたが、すでに狩猟免許をもっていたにもかかわらず一度も猟に行ったことがなかったことや、何より先生や先輩が行うのなら面白くなるのだろうという好奇心が勝り、手伝うだけならと入部しました。

ジビエホットドッグ

しかし、活動は自分が予想していたものよりもずっと大きな規模での活動でした。実際私が最初にした活動は「ジビエソーセージ開発のためのクラウドファンディング」でした。ジビエソーセージとは、主に獣害駆除のために捕獲されるも使い道がないため捨てられてしまうシカを利用したソーセージです。現在もサークルで行っているメインの活動ですが、資金を集めるために先生方の研究室をまわって資金集めをしたり、解体所やソーセージの加工場をまわって知識をつけたり人脈を広げていったりするなどしていきました。結果としてクラウドファンディングは成功し、ソーセージの開発が大幅に進む第一歩となりました。

私自身それまでジビエはもちろん山や獣害からも縁遠い暮らしをしていたため、活動を通して様々なジビエ料理を食べたり徳島県庁の獣害を担当している方や猟師さんから色々なお話を聞いたりすることはどれも新鮮な驚きがありました。それまでの私のイメージでは、日本で狩猟する人は山に住んでいるお年寄りが趣味程度でやっているものかと思っていましたが、獣害問題は県が資金を出してわざわざ駆除しなければいけないほど深刻で、なにより獣害問題に関わる人はどの方も真剣に問題に関わっていることがわかりました。またいつも多くの方に時間やお金といった様々な面で手助けをもらっており、自分たちの活動が期待されていることも実感しました。

クラウドファンディングでの一連の活動が終わってからは学内でソーセージの販売を行ったり、免許講習会を開催したりするなどしてサークルおよびジビエの認知に力を入れていきました。おかげで今では学内でも「ジビエソーセージを食べることが大学祭の一番の楽しみ」や「狩猟免許を取ってみたい」といった声かけをされることが随分と増えてやりがいを感じています。今後はジビエソーセージの商品化と自分たちが主催しての狩猟合宿といったことをやっていきたいと考えています。

昨年、設立者である高橋先輩やメインで活動していた多くの同期が卒業してしまい、一気に部員が減ってしまいました。しかし、様々なメディアや雑誌で取

狩猟免許講習会の様子

り上げてもらっていたおかげで大学に入る前から狩猟サークルに興味をもってくれていた新一年生が多く入ってきてくれました。サークルの活動や運営はとても大変ですが、おかげで大学院に入ってからも充実した時間を過ごせています。設立時から関わってきた部員として、多くの方に期待してもらっているサークルとして、プレッシャーはとても大きいですがさらに活動を活発にしていけるよう頑張りたいと思います。

徳島大学狩猟サークル“Revier Jagt”（レビア ヤークト）
Webサイト　https://revier-jagt.com

サークルでの集合写真

［連載❻］ My Workplace

私の職場

総合科学部が創立されて早や30年余。
国内外を問わず多方面の職場で活躍されている
渭水会々員の皆様に、職場の状況や特色、体験談など、
その職場ならではのエピソードを語っていただきました。

学芸員

あすたむらんど徳島での仕事

矢野陽子（やの ようこ）

私の職場である「あすたむらんど徳島」は、板野町にある大型複合公園です。甲子園球場約６個分の広い敷地の中には、子ども科学館やプラネタリウム、カレイドシアター、吉野川めぐりといった小さなお子様から大人の方まで一緒に楽しむことができる施設がたくさんあります。

あすたむらんど徳島（以下、あすたむらんど）は指定管理者 株式会社ネオビエントが管理運営を行っています。あすたむらんどの紹介をする前にここで少し、株式会社ネオビエントについてご紹介します。ネオビエントとは“新しい”を意味する接頭語「neo」と“風”を意味するスペイン語「vient」の造語です。観光や暮らしを通じて“新しい風”を起こし、徳島に関わるすべての人やものを元気にすることを理念にし、施設運営・イベント事業・地域ブランド創造事業・自治体等受託事業に従事しています。あすたむらんどの他にも、渦の道や大鳴門橋架橋記念館、那賀町にある川口ダム自然エネルギーミュージアムの施設管理運営を行っています。

私は、2015年に株式会社ネオビエントに入社し、あすたむらんどに配属となり、今年で５年目となりました。１年目はプラネタリウムにて解説員として星空の生解説をしていました。２年目から昨年まで

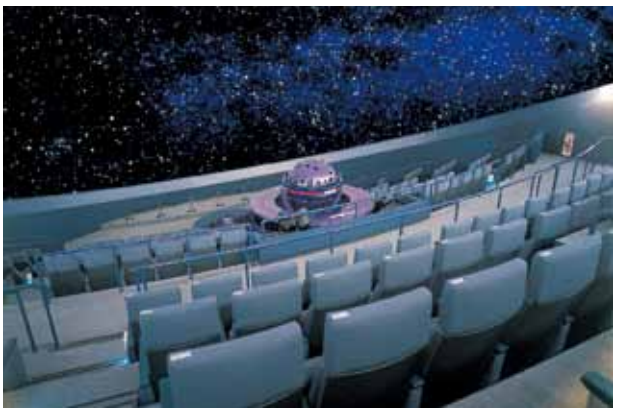
マスコットキャラクター“あすたむ”と

すべり台とジャングルジムが合体したような複合遊具わんぱく砦（冒険の国）

パッチンキーホルダーやダンボールクラフトなど
子どもから大人まで楽しめる工作教室。
工作材料費100円〜。期間限定工作もあり！

駐車場無料・入園料無料・園内は食べ物持込ＯＫ

は、子ども科学館にてイベントの企画運営、展示物の維持管理などに携わっていました。そして５年目を迎えた今年からは、子どもたちが自ら工作をすることを通して、科学やものづくりに興味を持ってもらう“体験工房”にて工作のサポートをしています。徳島大学在学中に子どもたちに実験やものづくりを通して科学のおもしろさを伝える活動に関わったことが科学館職員を目指すきっかけとなり、ここあすたむらんどにて夢を叶えることができました。



世界一の明るさを誇る投影機が約3万8000個の星々を映し出す。
星空解説はその日その時にしか聞けない解説員による完全生解説

さて、“あすたむらんど”という言葉に興味を持たれた方がいらっしゃるかもしれません。“あすたむらんど”とは、明日（あす）に多くの夢（たむ）がある場所（らんど）を意味しています。徳島の豊かな自然と無限の可能性を象徴とする『水・緑・光』をコンセプトとした遊具や展示物があり、マスコットキャラクターで水の妖精である“あすたむ”もお客様だけでなくスタッフにも大人気です。

遊びや体験を通して科学する心を育てる子ども科学館には直接ふれて体験できる展示物が120種類展示されています。その他、毎日２回の実演があるサイエンスショーや迫力満点の放電実験ショーを行うカミナリシアターがあり、月面散歩が疑似体験できるムーンウォーカーでは宇宙飛行士気分を味わえます。

そんなあすたむらんどでの仕事のやりがいは、何と言ってもお客様の笑顔です。「ありがとう」「楽しかったよ」という言葉とともに笑顔のお客様を見ると、この仕事をやっていてよかったと思うことができます。

お子様やファミリー向けの施設という印象が強いかもしれませんが、秋にはウォーキングのイベントや人気アーティストが多数出演するイベント、クリスマスシーズンには園内をLEDで装飾したイルミネーションを開催しており、学生さんや一般の方にも十分お楽しみいただけます。小さなお子様から高齢のお客様まで楽しんでいただけるイベントを日々考え、準備から実施運営まで行っています。少しでも多くのお客様にあすたむらんどを知って、訪れていただき、科学のおもしろさや楽しさを伝えていけるようこれからも努めてまいります。皆様のご来園を心よりお待ちしています。

（平成25年　総合科学部社会創生学科環境共生コース卒）

information

●あすたむらんど徳島
〒779-0111　徳島県板野郡板野町那東字キビガ谷45-22
TEL：088-672-7111　FAX：088-672-7113
開　園／午前9時30分
閉　園／午後5時　※7月1日〜8月31日は午後6時
休園日／毎週水曜日
（祝日の場合は翌日、8月12〜15日の水曜日は除く）
駐車場／約1300台（無料）　http://www.asutamuland.jp/

連載
②

総科をたずねて

～総合科学部の“いま”をご紹介します～

教員を目指す仲間づくりを大切にして ～教員養成の現状～

徳島大学教職教育センター　センター長　坂田（さかた） 大輔（だいすけ）

「苦しい時も、教員を目指して高め合い支え合う仲間がいたからこそ乗り越えることができ、採用試験に合格することができました。皆さんのそばには、いつも苦しみも喜びも分かち合うことができる仲間がいます。仲間とともに合格目指して頑張ってください」

これは、昨年度総合科学部を卒業し、本年度から藍住町立藍住東中学校教諭となった三木愛梨さんが、教員を目指す後輩に語った言葉です。三木さんは、平成27（2015）年度入学生であり、平成28（2016）年に行われた常三島地区改組以前の総合科学部の最後の卒業生です。

教職の授業で学ぶ学生

常三島地区改組以前、平成21（2009）年の学部改組により３学科となった総合科学部は、中学校教諭（国語、社会、数学、理科、英語、美術、保健体育）、高等学校教諭（国語、地理歴史、公民、数学、理科、英語、美術、保健体育、情報）の教職課程を有し、60～70名程の学生が教員免許状を取得して、その半数程が教員採用試験を受けていました。この教職課程の維持及び充実を目指して、平成22（2010）年に、教職経験者である大宮俊恵氏を、平成24（2012）年には同じく教職経験者である坂田を准教授として採用し、この２名を中心に教員養成体制の充実を図りました。その結果、総合科学部では、平成24（2012）年に11名（のべ13名）、翌年も９名（のべ10名）、平成27（2015）年には最多の14名（のべ15名）と、毎年10名前後の教員採用試験現役合格者を輩出してきました。

これまでの現役合格者が口を揃えて言うのが、先述の三木さんの言葉にある「教員を目指して高め合い支え合う仲間がいたからこそ、採用試験に合格することができた」ということです。以前から、学部の先生方が、専門の筆記試験に対応するためのセミナーを開いてくださったり、模擬授業指導や個別指導をしてくださったり、二次試験対策講座を開いてくださったりしていましたが、それらに加えて、平成24（2012）年度からは「教員養成講座」を週２回開講することにしました。この講座では、教員を目指す学生を募り、年間を通じて教育課題についての理解を図る指導、集団討議･集団面接指導、模擬授業指導（講座以外でも個別に小論文指導、個人面接指導等も行う）を行います。この講座において、毎年、私が学生にまず話すのは、この講座に参加する全員で合格しようということ、仲間に学びながら高め合い支え合って頑張っていこうということです。３年後期からこの講座に参加する学生が多いですが、採用試験までの１年間ともに学ぶ中で、仲間のよさを認め合い伝え合える仲間、仲間に学び高め合える仲間、気持ちを分かち合い支え合える仲間となっていきます。そのような仲間になると、時間を作って自分たちで集団討議や模擬授業、個人面接の練習を行うようにもなってきます。一昨年度末には、「ひとりでも多く教員採用試験に合格し、夢を叶えること、教員としての資質・能力を向上させること」を目的として、学生自らが徳島大学教職サークルを立ち上げるほどになりました。どの学生も、教員になることを目指して、誠実に努力を重ねます。その学生は、高め合い支え合う仲間を得ることによって、より一層自分で自分を育てる、仲間とともに育つことができるようになります。このことが、教員への近道になっているように思います。

講座で教員志望動機を語り合う学生

平成28（2016）年の常三島地区改組により、総合科学部の３学科が有していた教職課程は、総合科学部社会総合科学科（中学校教諭［国語、社会、英語、美術、保健体育］、高等学校教諭［国語、地理歴史、公民、英語、美術、保健体育］）、理工学部理工学科（中学校教諭［数学、理科］、高等学校教諭［数学、理科、情報］）において、それぞれ文部科学省に認定され、医学部保健学科の養護教諭の教職課程と合わせて、教職課程を有する学科が３学部に渡ることになりました。このことに伴い、全学的に教職課程の維持及び充実を図るために、平成28（2016）年４月、教職教育センターが設置されました。現在、坂田（教授、センター長）、中川隆彦准教授（大宮氏、多田耕造氏の後任、副センター長）の２名を専任教員として、学部の先生方と協力しながら、教員をめざす学生の支援活動、教員としての資質・能力向上のための指導･支援を行っています。もちろん、「教員養成講座」もこれまで同様開講し、今では３学部の学生が集まって、教員を目指して高め合い支え合う仲間となっています。

講座の集団討議で発言する学生

今年度、改組後初めて、卒業生が教員となります。一人でも多くの学生がこの夏の教員採用試験を突破し、４月から教員として活躍することを願います。

生徒が輝く理科の授業を目指して

石丸 優貴（いしまる ゆうき）

私は、徳島大学総合科学部総合理数学科物質総合コースを平成28年３月に卒業しました。大学４年生の時には、教員採用試験のための面接や小論文など、丁寧なご指導をいただいたこともあり、その年の４月に徳島県の中学校理科教員として採用され、現在４年目です。

この４年間、新米先生として無我夢中で走ってきて、あっという間に過ぎていきました。改めてこの４年間を振り返ると、とても充実したもので、最近、教員の長時間労働が問題視されていますが、確かにそういう一面もあるかもしれませんが、私にとって先生という仕事はとてもやりがいのある仕事であると感じています。特に、生徒が何かを発見したり、達成したりしたときのあのきらきらと輝いた目を見せてくれたときのうれしさは、教員になってよかったと思える瞬間で、それまでの苦労がすべて吹っ飛んでいきます。

「先生、やりました！」と生徒が、誇らしげに賞状を見せにやってきました。理科の研究発表会のときです。県大会への出場をかけた市大会。夏休み返上で、生徒の研究活動を指導してきました、というか、いっしょに研究しました。その結果、見事、県大会出場を決めることができました。ここには、私自身の大学での学びや経験が大きく影響していると思っています。大学では、卒業研究として、水質浄化作用とその評価についての研究に携わらせていただきました。さらには、学会で発表をさせていただくという機会もいただきました。その中で、科学的に探究していく過程やデータの処理・評価の仕方などについて、体験的に身につけることができました。さらには、科学的な研究になるようにするために、どのようにまとめ、どのように伝えるかということついても学ぶことができたと思います。このことが、生徒の研究活動を指導する上で役だったことは間違いありません。

大学の授業では、有機化学、無機化学、物理化学、分析化学など専門的なことを学びましたが、ある講座で自分で生徒達にさせる実験を考えそれを検証するという講座がありました。私は、身の回りにあるもので指示薬として活用できるものがあるかを調べるという実験を考え、マローブルーで用いて行いました。しかし生徒達がその実験をしたとき、それだけではおもしろさに欠けると思い、単に色が変わるというだけでなく、中和点との関連を科学的に評価していくというものにしました。このときに、初めて教師目線で実験を考えることができ、総合科学部に入学してよかったと思ったのを記憶しています。大学入学当初から、理科の教員になりたいと思って総合科学部を選んだのですが、生徒には、理科の楽しさや面白さを伝えることのできる教員になりたいと思っていました。そのためには、理科を単なる学問としてだけでなく、身の回りの現象や物質との関

わりの中で、理科というものを教えたいなあと漠然と思っていました。それを解決した授業の１つがこの授業だったのです。教員になった今、できるだけ身の回りの現象や身の回りにあるものを工夫して使いながら授業をするように心がけています。生徒の目の輝きが違います。

平成33年度から全面実施される学習指導要領においては、知識の理解の質を高め資質･能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が求められています。これからも、総合科学部で学んだことを生かしつつ、生徒とともに自分自身も学び続け、とくしまの未来を切り拓く、夢あふれる生徒を育成できるような教員を目指していきます。最後になりましたが、多くのことを学ばせていただいた徳島大学の先生方、友人のみなさんに大変感謝申し上げます。

（平成28年　総合科学部総合理数学科物質総合コース卒）

誰にも負けない経験

松田（まつだ） 莉奈（りな）

徳島大学を卒業してから２年、今でも現場で悩んだときは大学時代に学んだ資料を引っ張り出して読み返し、初心に戻っています。私にとって大学４年間で学んだことすべてが宝物であり、現在の私をつくってくれたものです。

教員になることが幼いころからの夢であり、教育学部ではない徳島大学に入学したことは正直不安でした。入学式で意気投合した友人も教員志望であり、入学して間もなく教員養成担当の坂田先生の研究室を訪ねたことを今でも覚えています。坂田先生は、「１年生の時は、勉強だけでなく、ボランティア活動などを積極的にしたらいいよ」とアドバイスをしてくださいました。私は、この時、教員になるために必要なこと、教員になってから必要だと思うことを何でも挑戦することに決めました。

その日から、教育に関するボランティアやアルバイトなどの情報が入れば積極的に取り組みました。また、大学での勉強をしていく中で、中学校の社会科の教員になりたいと思うようになり、教育関係の経験だけでは足りないと思うようになりました。

大学３年生になってからは、学生主体のイベントにスタッフとして参加したり、朝市に出店したり、地域と関わることができるような経験を積極的に行うようになりました。特に朝市に出店した経験は私を大きく成長させてくれました。約１年間出店し続けてきましたが、最初は既製のものを売ることしかしませんでした。不必要になった本や服などをかき集めて、ブルーシートに並べていました。周りは商売のプロばかりで、お客さんは私の商品を見ようともしません。確かに、私が客の立場でも買おうと思いません。そこで、ゼミの先生にも協力してもらい、商品作りから販売の仕方まですべて一から勉強し直すことに決めました。この時の私は、目先の商品を売りたいという目標の先に、いつか教員になったときに、生徒にこの経験を何らかの形で伝えたいと思っていました。商品作りは、宮城県まで行って技術を教えてもらい、ラッピングや宣伝方法、店構えなどは試行錯誤しながら進めていきました。最初はうまくいきませんでしたが、応援してくれる人が少しずつ増えていき、やってよかったなと心から思っています。この経験を通して、商品を作って売るという難しさを学び、徳島で商売を頑張っている人たちを知ることができ、応援してくれる人が周りにいることに気づくことができました。

私は、教員になるにあたって、教育の勉強をどれだけやったのかではなく、誰にも負けない経験をしているかどうかだと思っています。私は、徳島大学に入学していなければ様々な経験をすることはできなかったし、坂田先生の「勉強だけでなく、いろんなことに挑戦したらいいよ」という言葉を１年生の時に聞いていなければ、何も始まっていなかったと思います。誰にも負けない経験を１つ持っていたことで、教員採用試験の筆記の勉強も集中して取り組むことができました。私は特別社会科の知識が多いわけでも、生徒指導ができるわけでもありません。しかし、誰にも負けない経験を１つ持っていることと、臆せず挑戦する行動力があることだけは自信をもっています。この自信をくれた徳島大学と指導してくださった先生方に感謝いたします。

（平成30年　総合科学部社会創生学科地域創生コース卒）

輝く新星

第5回
渭水会
会長賞

左から岸田さん、浅成さん、濱尾会長、平田さん、森さん

平成26年度に創設された「渭水会会長賞」。
これは、研究及び学生としての活動全般において優れた学生に対して贈られるものです。第4回からは、対象を院生にも拡げ、学部生３名・院生1名に贈呈しています。
平成31年3月22日（金）、総合科学部1号館第２会議室において表彰式が行われました。

平成30年度（第5回）渭水会会長賞の受賞者は
平田　晶子さん（大学院総合科学教育部地域科学専攻 基盤科学分野（理系）修了）
岸田　卓巳さん（社会創生学科　環境共生コース）　浅成　康汰さん（人間文化学科　国際文化コース）
森　　篤志さん（総合理数学科　数理科学コース）　　の４人です。

世界1位を目指したものづくりから学んだこと

平田 晶子（ひらた しょうこ）

今年の春に徳島大学を卒業して、現在はエンジニアとしての社会人生活を送っています。６年間の大学生活を振り返ると研究活動が１番強く印象に残っています。と言うのも私は高校時代に手にした漫画に感化され、その頃から徳島大学の量子科学研究室で宇宙物理学について研究することを夢見ていたからです。そして研究室配属では、無事希望していた研究室に配属が決まり、３年間量子科学について知識を深めることができ、非常に充実した研究生活を送ることができました。

研究生活では暗黒物質（Dark matter 以下DM）の解明に尽力しました。DMとは宇宙の約26%を占める未だ謎の多い粒子であり、この粒子の解明が宇宙で起きている謎多き現象を解き明かす糸口となると宇宙物理学者は考えています。私もこの粒子の謎を解明すべくDMを捉えるための検出器の開発を進めました。この検出器はヨウ化ナトリウムと呼ばれる無機結晶（以下 NaI結晶）と高感度光センサーで構成されており、宇宙から飛来してきたDMがNaI結晶中の原子との衝突時に放出する微弱な光を高感度光センサーにより検出する装置です。

これまでにイタリアの宇宙暗黒物質研究グループは長年にわたりNaI結晶を用いてDMを捉えているという研究結果を報告しています。しかし、誰も再現実験を行うことが出来ずにいました。なぜなら、彼らの持つ結晶の純度が世界一であり、その製造方法を全く公開することが無かったためです。そこで、徳島大学の伏見教授率いるDM探索グループのPICOLONでは、世界１位のNaI結晶を製造し、イタリアの研究グループの主張の真偽に迫るべく研究が行われていました。私も学部、修士に渡ってPICOLONグループに所属し、開発した検出器よりNaI結晶の高純度化と製造したNaI結晶の性能評価を行いました。実験内容が難しいことはもちろんですが、何より難しいのはNaI結晶の性能評価です。結晶中には様々な不純物が含まれています。世界一の純度を誇る結晶を生み出すためには「どういった成分が含まれているのか」「その成分がどれだけ混在しているのか」「どれだけ取り除けばいいのか」また、「どういった方法で取り除けばいいのか」あらゆることに対して試行錯誤する必要がありました。そんな研究に行き詰まっていた私に転機が訪れたのは修士２年の時でした。それまでは、製造の様子を教授の話や資料から得ており、NaI結晶の性能評価を行っていました。しかし、初めてNaI結晶の製造作業に携わる機会があり、製造作業に携わる過程について詳しく考察することができました。実際に私自身が“もの”を作る過程から携わることによって、より製造環境や工程を詳しく理解することができました。この経験は私にとって貴重な経験となり、

NaI結晶への不純物の混入を防ぐための方法を、得られた測定データから検討するだけでなく、どのようにして“もの”自体が出来ているのかを熟知する必要があったと強く感じるきっかけになりました。

現在、私は工場に勤めています。工場で製品を作っている人たちが仕事をしやすいように設備の導入、管理をしています。現場で設備トラブルがあると現地に向い対応します。どのような機械があり、どういった仕組みかを理解していないと対処できません。また、生産活動における環境や人への配慮など様々なことを考えて設備を整えなければなりません。これらを最適化するためには研究室で学んだ「製造環境や工程を理解する姿勢」が必要です。

大学とはただ学問について知識を深めるための場だけではなく、問題解決のための姿勢についても学び、自身を磨くことのできる場でもあると私は考えています。

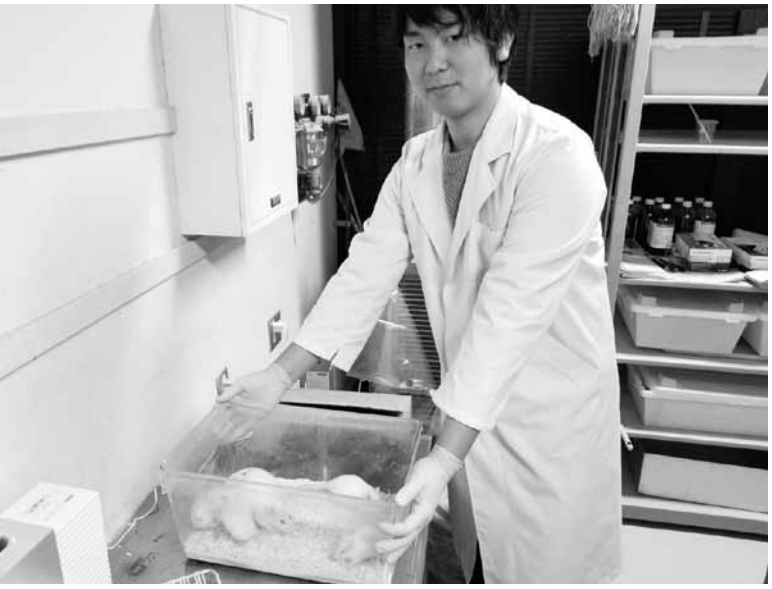
最後になりましたが、担当教授である伏見教授をはじめ、研究室の方々、在学時にお世話になりました全ての方々に感謝申し上げます。PICOLONグループと徳島大学の益々の発展を心から願っています。

（平成29年　総合科学部総合理数学科物質総合コース卒）
（平成31年　大学院総合科学教育部地域科学専攻 基盤科学分野（理系）修了）

今やるべきことと、今やりたいこと

岸田（きしだ） 卓巳（たくみ）

私が大学時代に学んだことは、今やるべきことと、今やりたいこととの両立です。私のような者が言うまでもなく、皆さまならお分かりかと思いますが、学生の本分は勉強です。しかし、大学生になった瞬間に、世界というものは大きく広がります。そのため、自分のすべきことを見失う人がいるのも確かです。かくいう私もそうでした。高校生までの、ある意味狭い世界から、大学生という勉強も暮らしも全てにおいて自由度の高い立場になったのです。当然、はじめはその立場に甘え、遊び呆けてしまいました。つまり、今やりたいことばかりになってしまったのです。やるべきことがなかった訳ではなく、長期間的にはやるべきことがありました。しかし、目の前を短期間的に見れば、今やらなくてもよいことであるため、今やりたいことばかりになってしまうのです。また、そんな考えでやっていた今やりたいことというのは、本当にやりたいことなのかどうかあまり精査されていなかったため、ただただ時間とお金の浪費になっていたのでした。



研究に使うラットを飼育しています

私がそれに気づき、考え方を変えたのはちょうど学部３年生の頃でした。研究室に配属され、今やるべきことが明確になってからです。研究室に配属になると、当然研究をしなければならなくなります。これは短期間的に今やるべきことですから、そうした状況に直面したときに、初めて今やりたいことだけをしているということができなくなってくるのです。すると、自分の行動を精査するようになります。今やるべきことが多く、限られた時間の中で今やりたいことをしなければならなくなるため、今やりたいことの中から本当に今やりたいことは何なのかということを考えるようになりました。今だから言えることですが、この考え方は社会人になってから非常に大切なことなのだと感じます。

具体的な話をします。私は当時、研究室で細胞情報学を取り扱っていました。より詳しく説明する

と、ラットの胸腺細胞を用いて、生体に対する薬品の作用や、どの程度の濃度で作用するのかということ等を研究していました。これが私の今やるべきことでした。そして、私の今やりたいことだったのは、趣味の車でした。しかし、そのためにはお金が必要でした。そのため、私はそれを叶えるためにアルバイトにのみ精を出すようにしました。すると、自分の中である程度のルーティンが出来てきます。そうなってくると、時間やお金の浪費が激減しますので、今やるべきことをしつつ、今やりたいことのためにも頑張れました。そして、目標だった自分の愛車を学生のうちに買うことができました。こうして、今やるべきことと、今やりたいことを天秤にかけ精査することで、非常に生産的なことを出来るようになれたと確信しています。

愛車の写真です

こうした経験があったため、現在は社会人としてしっかりと今やるべきことと、今やりたいことを精査し、しっかりと生産的に生活できていると思っています。これが今出来ているのも、学生時代にいろいろな失敗を経験したからであり、成功を経験したからであると考えています。これからの生活でも、失敗を恐れずにそこから学ぶ姿勢を持ち続け、頑張っていこうと思っています。

（平成31年　総合科学部社会創生学科環境共生コース卒）

千里之行、始于足下

浅成（あさなり） 康汰（こうた）

武漢大学合気道部とその先生

私は歴史学、特に中国史を学びたくて徳島大学に入学しました。大学生活を振り返ると、自分の人生を変える出会いが数多くありました。特に、大学生時代に経験した「中国留学」によって、自分の人生観が変わりました。

一年生の頃から留学に興味があり、説明会などに参加はしていましたが語学力への不安や費用の問題もあり、なかなか実行には移しませんでした。そんな中、南京に一週間ほど行く短期研修がある事を知りました。中国人の先生が付いてきてくださり語学力も心配いらず、奨学金も出て費用の問題も無く、さらに私の好きな三国志の遺跡にも行けるという事だったので、すぐ応募しました。短期研修に行くまでは、留学するとなると躊躇する事も多かったのですが、いざ勢いで行ってみると心配したような事はなく楽しめました。初めの一歩が肝心だと思いました。短期研修が終わってからは、台湾での短期研修や南京での短期研修に再び参加しました。二度目の南京で長期留学中の院生の方の話を聞いているうちに、自分も長期留学してみたいなと思いました。そんな時、先生方に中国の武漢大学に留学する話をいただきました。

万里の長城

卒論で扱った馬超のお墓

武漢への留学は長期という事もあり不安もありましたが、いざ行ってみると日本人の先輩方に助けられながら、何とか生活できました。語学力も中国語で中国語の授業を受けているうちに徐々に会話ができるようになり、語学の不安も無くなりました。また、徳島大学で合気道部に所属していたので、武漢大学でも合気道部に所属し中国人に合気道を教えるという貴重な体験もできました。休みの日には中国の新幹線である高速鉄道を使って北京・上海・西安などの観光地や赤壁・古隆中・虎牢関などの三国志遺跡を見に行きました。長期留学に行かなければ、こんなに数多くの観光はできなかったと思います。通訳なしで中国を旅行できる程度の語学力を身に付けられたのは、人生における大きな成果です。

さらに、中国という土地を実際に自分の目で見たことで、中国に対する考え方も変わりました。一つの大きな国だと思っていましたが、実際は多種多様な民族が似たような文化を持ちつつ共存しているように見えました。この発見が、私の卒業論文にも影響したと思います。卒業論文では、三国志の時代の馬超という人物について研究したのですが、その頃にはすでに漢民族と異民族の融合が始まっていて、まさに今の中国の民族問題と変わらない状況であったのではないかと考えています。歴史学では書物や遺跡など限られた情報しか与えられませんが、その表層的な情報から深層的な実態を浮かび上がらせる作業を通して、歴史を学ぶ能力が培われたと思います。

私の大学生活では中国留学だけでなく、自転車で四国一周したり合気道部で弐段まで昇段したりと周りの先生方や先輩、友人に助けられながら様々な事に挑戦しました。徳島大学で培ったこのチャレンジ精神を生かして、社会に出ても様々なことに挑戦し続けたいです。多くの貴重な経験をさせていただいた徳島大学に感謝しております。

（平成31年　総合科学部人間文化学科国際文化コース卒）

北海道から感謝を込めて

森（もり）　篤志（あつし）

私は、平成31年３月に徳島大学総合科学部総合理数学科数理科学コースを卒業し、現在は徳島大学で得た知識、経験をもとに北海道大学大学院理学院数学専攻修士課程において、様々な現象に対して数学を用いて解析を行う研究室に所属しています。徳島県に来た当初、風が強く、近くに大きな川が流れているという地元との環境の違いに戸惑いながら生活していた日々のことを思い出し、時には懐かしみながら、現在は北海道で滋賀とも徳島とも全く異なる気候環境の中で勉強と研究に励む毎日を過ごしています。

私は滋賀県の高校を卒業してから、一年間の自宅浪人の生活を経て、徳島大学総合科学部に入学しました。私が総合科学部総合理数学科を選んだ大きな理由としては、数学を学ぶことが出来るコースが

北海道大学の写真（秋になると紅葉になるそうです）

人文科学や社会科学などの所謂文系学科と同じ学部にあったということがあります。それは、私が中学生高校生の時代から数学以外にも歴史や哲学などの様々な分野に興味を持っていたからです。実際、徳島大学に入学後も、人間文化学科に所属する友人などから様々な話を聞いたりする機会に多く恵まれ、とても充実した学生生活を過ごすことが出来ました。

学生生活の中での思い出を挙げると数えきれないのですが、一番印象に残っているのは数学コースに所属する先生たちとの関わりです。４年時の卒業研究でお世話になった指導教官の大沼先生には、週二回のセミナーで「数学を学ぶ」ということの難しさと楽しさ､学ぶ姿勢について教えていただきました。自分の理解していないことを飛び道具のように使うのではなく、例え地味でも、小さなことから着実に理解をしていき、論証していくという姿勢の大切さを学びました。このことは、数学を学ぶこと以外の場面においても大切であると、私の人生観において大切なことの一つになりました。

指導教官の大沼先生以外にも、数学の質問にいつも親身になって答えてくださった宇野先生や大渕先生、様々な本を貸してくださった村上先生など、多くの先生方のご厚意により、本当に素晴らしい時間を過ごし、経験させていただいていたのだと感じています。

先生方との関わり以外にも、数理科学コースに所属する友人と学生室で遅い時間まで「計算が合わない」とホワイトボードを使って計算したという思い出、４年生の教育実習前後や大学院試前に体調を崩してしまい、心が折れかけていた時に支えていただいた大学職員の方々や先生、友人には感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりましたが、渭水会会長賞をいただき、誠にありがとうございました。このように振り返る貴重な機会をいただき、当時は気が付かなかった、当たり前だと思っていたことの大切さに気付くことが出来ました。徳島大学では、専門的な知識を得るだけではなく、生きていく中で大切なことを学ぶ経験をさせていただいたのだと感じています。

そして、徳島大学で過ごした４年間の中で関わったすべての方、徳島大学で過ごす機会を与えてくれた両親への感謝の気持ちで溢れています。今後も様々なことに挑戦し、生涯を通して成長していきたいと思います。ありがとうございました。

（平成31年　総合科学部総合理数学科数理科学コース卒）

徳島大学総合科学部渭水会会長賞表彰要項

（目　的）

第１条　研究活動及び学生としての活動全般について優れた者を表彰する。

（表彰人数）

第２条　学部生３名、院生１名とする。

（表彰者の選考）

第３条　学部生は４年次前期終了、院生は修了・退学時の前期終了までの研究活動・社会活動・成績等に基づいて行う。

第４条　次の基準に該当するもの。

（１）研究活動・社会活動等で優れた業績を有する者

（２）GPA上位者

（表彰の決定）

第５条　表彰の決定は、学部長が招集する選考委員会で協議し、渭水会会長に推薦し、決定する。

（表彰の時期等）

第６条　表彰は、学部生においては４年次後期、院生においては修了・退学時の後期に渭水会会長が行う。

副賞として１名につき５万円を給する。

（要項の改廃）

第７条　この要項の改廃は、総会の議によって行うものとする。

附　記　平成29年５月27日（土）の総会で決定し、平成29年度より実施する。

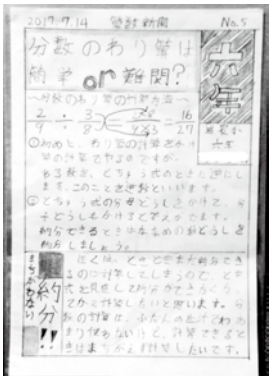
｜エ｜ッ｜セ｜イ｜

NIEの歩み

野口幸司（のぐちこうじ）

NIE（Newspaper in Education）は、エヌ・アイ・イーと読む。新聞を教材として活用し、新聞作りを行ったりメディア・リテラシーを学んだりする活動の総称である。欧米諸国ではNIEは民主主義社会のためという共通認識が浸透しているが、日本では学力向上における効果を期待して取り入れられる場合も少なくない。

徳島県においては2014年８月、あわぎんホールを会場にNIE全国大会が開催され、レベルの高い実践が全国に発信された。日本新聞協会NIEアドバイザーであった私は、全国大会シンポジウムのコーディネーターとしてこの大会に参加した。記念講演の講師でありシンポジストでもあったオックスフォード大学教授刈谷武彦氏とは、事前にメールでの打ち合わせを行った。メールのやり取りや大会当日の刈谷氏の発言から、民主主義の根幹は賢い市民の判断であり、賢い市民の育成に資することこそNIEの最大の使命であることをいっそう強く認識させられた。



2018年NIE全国大会盛岡大会で公開されていた算数の葉書新聞

この大会をきっかけに全国各地のNIE関係者とつながりができ、新しい実践の情報が得られるようになった。最近注目しているのは、「葉書新聞」である。高知県NIE研究会との合同研修会で体験した「葉書新聞」は、葉書サイズの小さな用紙に新聞の形式を使って情報をまとめるもので、学習のまとめや振り返りに教科を問わず使えるものだと、今後の活用に期待している。

元徳島県教育委員会教育委員長の西池氏裕氏（にしいけうじひろ）が2014年８月15日付徳島新聞掲載の「時評とくしま」で「現在のNIEは残念ながら一部の先進的な先生の活動にとどまっている」と指摘されているが、その状況は５年たった現在も大きくは変わっていない。しかし、活字離れの進行に伴う言語能力の低下が顕著となるにつれ、危機感から新聞の活用を見直す動きが少しずつ増えてきている。

学校を訪問して授業を行う筆者。徳島県教育委員会学校訪問指導員としての指導助言も行っているが、自分で授業をする方が楽しい

私は退職後の2019年４月から徳島新聞メディアNIE・NIB推進室という職場に籍を置いている。NIBはNewspaper in Businessのことで、県内の銀行や企業、市役所などが新任研修に取り入れている。企業に出向いて研修を行っているNIBの担当者によれば、これらの企業は、新入社員の言語能力と社会的関心の低さに強い危機感を抱いているという。名の知られた大学を出てきた新入社員が、読めない、書けない、まとめられないというのである。学校教育に欠けているものがあったのではないかと、責任を痛感せずにはいられない。

今年、NIB担当者と私が取り組みを始めた研修がある。徳島新聞のコラム「鳴潮」の「３色読み」である。「３色読み」は、明治大学の齋藤孝氏が提唱した読み方で、非常に重要な部分には赤線、やや重要な部分には青線、個人的に関心を抱く部分には緑線を引きながら読むという方法だ。この方法を援用し、「鳴潮」を100字に要約するために必要な要点80～120字に赤線を、赤線部分の説明や補足となる部分に青線を、個人的な興味の対象となる部分に緑線を引くのが「鳴潮３色読み」である。６～８月の３か月間、モニターを対象に月・水・金の週３日、正午に解答例をメール配信している。９月以降は有料での実施となるが、文理中高や附属中も、読解力・要約力育成の効果に着目して採用を検討している。

教科書にも、「新聞を読もう」（光村図書）、「新聞記事を読み比べよう」「投書を読み比べよう」（東京書籍）など、新聞を題材とした教材が見られるようになった。

まず重要なことを先に書くという新聞の構成や、第三者の視点から述べる文体は、実用文の典型である。文学教材や起承転結型の文章に重きを置いてきた教科書にも、変化の兆しが見られる。平成31年４月に実施された全国学力・学習状況調査中学国語の問題に新聞が取り上げられたのは、新聞に掲載される記事・文章の多様さに着目した結果だと考えられる。

学校を訪問して新聞を使った出前授業を行ったり、開発した教材をホームページに掲載したりするのが、現在の私の仕事である。教員時代に育てきれなかった子供たちの言語能力や社会的関心の育成に少しでも役立てればと願いながら、新しい仕事に取り組んでいる。

（昭和56年　教育学部中学校教員養成課程国語教室卒）

｜エ｜ッ｜セ｜イ｜

小学校体育連盟とともに

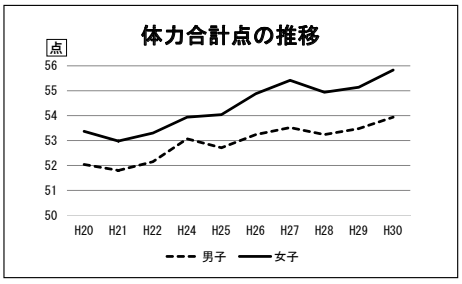
中江英生（なかえ えいせい）

小学校の教員として37年目を迎えました。定年まで２年を切り、そろそろ定年後のことも考えないといけないかなあと思い始めましたが、日々の業務に追われるだけで一日が過ぎていっています。

私の教員生活は徳島県小学校体育連盟（以下連盟）とともに歩んできたように思います。37年間ずっと連盟の一員として多くの先輩方、同僚とともに小学校の体育に関わってきました。昨年からは、連盟の会長に選出され本年２年目を迎えています。そこで、連盟のPRを兼ねて紹介をさせていただきたいと思います。

連盟は、昭和23年に発足しました。当時文部省から出された「学校体育指導要領」の趣旨が県内全ての学校の体育学習に具現化されるよう、指導資料の作成をしながら、授業研究会を盛んに行ったそうです。体育科は教科でありながら教科書がありません。その上、小学校では体育を専門としていない教員も体育の授業に携わります。そういう中で、指導要領に沿う体育学習を県内全ての子供に提供したいという先輩諸氏の志と情熱に胸を打たれます。同時に、当時のご苦労は大変なものであっただろうと推察できます。現在でも、発足当時の志は受け継がれています。体育学習の充実は、これまでも、そしてこれからも連盟にとって最も重視している目的の一つです。

近年、小学校５年生を対象にして、全国体力テストが行われるようになり、児童の体力の低下が数値として示されるようになりました。本県児童も体力の低下は喫緊の課題として、徳島県教育委員会の指導・助言をいただきながら、連盟が連携して体力の向上を図る取組を進めてきました。その結果は次のグラフの通りです。



平成20年度から平成30年度にかけて徐々にではありますが、上昇傾向にあることが分かります。連盟の会員が、各学校で体力向上の推進役として活躍してくれているおかげと思い、会長としてこれほどうれしいことはありません。

このほかにも、体操発表会、陸上運動記録会、水泳能力検定会も毎年開いています。児童の生き生きとした活躍を目の当たりにするとき、教員として勤められる幸せを一番に感じるときです。

今年は、11月に中・四国小学校体育研究大会（徳島大会）が開催されます。会長として大会を成功させるとともに、残りの任期を全うし、先輩諸氏の志と情熱を今後も若い教員に引き継いでいけるよう尽力していきたいと思っています。

体操発表会（鉄棒）

（昭和58年　教育学部小学校教員養成課程保健体育教室卒）

徳島大学書道部OB会総会・研修会

徳島大学書道部OB会会長　富久和代（とみひさかずよ）

徳島大学書道部OB会は、会員相互の研修と親睦を図ることを目的とし次のような活動しています。毎年１月２日に総会・研修会・新年会を実施し、３月には学生と共に「徳島大学書道部・OB会書作展」を開催し、部員数が減少している書道部の支援とOB会員の作品発表の場としています。

今回助成をいただいた総会・研修会は、第60回を迎え、平成31年１月２日徳島市のザ・グランドパレスを会場に開催しました。参加者は20名（内渭水会会員17名）でした。

総会後の研修会は、特別支援教育に取り組んできた津田小学校指導教諭岡田美紀子さんから「伝える力を育てる～特別支援学級におけるいじめ問題への取り組み～」と題した講話をいただきました。主な内容は次の通りです。

＜取り組みの２大柱＞

①自立活動「みんなで考えよう」で日常の課題を取り上げて学習する。

②日常生活で子ども相互の関わりの場を設定する。

＜実践内容＞

①安心して学習に取り組むことができる工夫

・見通しをもつことができる授業構成

・視覚的な手がかり

・発達段階や特性に合わせたワークシート

②主体的・対話的に学習に取り組むことができる工夫

・ホワイトボードを使った話し合い活動

・しつもん・あいづち名人カード

③学習したことを実践できるための教具の工夫

・にこにこそうだんカード

子どもたち一人一人への丁寧な関わりによる信頼関係をもとにした熱心な取り組みに、参会者から感銘を受けたとの感想が聞かれました。

新年会では近況報告やゲームを楽しむ中で、年齢差を超えて会員相互の親睦を深めることができました。

本会は今回で60回を数えることができましたが、よくぞ続けることができたという感慨があります。初回から出席しておられる先輩方がだんだん少なくなり、寂しさを感じる一方で、退職して出席できるようになった方々も増えて、新たな楽しみが出てきました。学生時代に書道を通じて同じ時を過ごした者同士が、再び集える機会として、これからも続けていきたいと考えています。

（昭和42年　教育学部中学校課程国語教室卒）

教育課題研究会

奥村兆男（おくむらよしお）

教育課題研究会は、現代の教育現場の様々な課題を幅広く取り上げ、各種の講演会や研究会に参加し、その内容について感想や意見を出し合い、教師力の向上を目指す研究グループです。

今回は、令和元年８月８日（木）に行われた「いのち」に関する講演会をテーマに話し合いました。当日の講師として、徳島市教育委員会　石井　博教育長とAMDA（アムダ）兵庫　江口貴博理事長をお招きしました。

第１講座の講師は、石井教育長で、演題に「いのちの教育」とあるとおり、石井教育長がご自分の教師生活を振り返り、「教師の一言が人生を支える」、「教師は命を救える仕事」であると、自らの実践に基づき、かつての生徒との関わりを熱く語っていただきました。

また、最近の未成年の自殺率に警鐘を鳴らし、徳島市教育委員会作成の「心」の応援プロジェクトの授業用プレゼンテーションを交えながら、自分や友達の命を大切にすることを訴え、「教師の一言で、子どもの人生が変わる時もあり、教師とは、人を充実した人生へと導くことのできるすばらしい仕事である」と締めくくられました。

第２講座の講師は、AMDA兵庫の江口貴博理事長で、演題は「救える命があれば、どこへでも」でした。江口氏は、神戸大学脳神経外科医学博士の傍ら、AMDA兵庫の理事長としてご活躍中です。「AMDA」とは、「アジア医師連絡協議会」の頭文字で、災害や紛争等の際に、医療･保健分野を中心に緊急人道支援を行う団体で、演題の「救える命があれば、どこへでも」が、AMDAのキャッチフレーズだそうです。「困った時はお互いさま」の心で、国内外で発生する自然災害被災者の支援にあたっています。昨年７月の西日本豪雨災害への支援や阪神淡路大震災の支援へのお礼としてネパールに建設した子ども病院での取り組みを中心にお話くださいました。ネパールの子ども病院で、これまでに受け入れた患者は延べ75万人で、５万人以上の赤ちゃんがここで誕生しており、開院20周年を迎えました。

その中で特に心に残ったお話として、「ローカル・イニシアチブ」の紹介がありました。「現地の人が一番よい解決法を知っている」との考えにより、徹底した現場主義に基づいた活動を行っており、「人道援助の三原則」として、

１　誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある。
２　この気持ちの前には、国境、民族、宗教、文化の壁はない。
３　援助を受ける側にもプライドがある。

を挙げ、この三原則が、活動成功の鍵と捉えていました。

例えば、西日本豪雨災害の支援物資の輸送について、東日本大震災での遅配や九州北部災害での未達の経験から、宅配業者による輸送でなく、自ら運び、確実に届けたそうです。また、必要な支援物資は日々変わることや、現地の人間に直接聞くのが一番であるという思いから、AMDA本部の調整員と連絡を取り合い、前日の夜や当日の高速インター付近で必要物資を調達しながら現地入りしたそうです。

今後起こるとされている南海トラフの津波災害においても、「ローカル・イニシアチブ」を行動原則に支援していくことが大切であると指摘していました。

講演会後の情報交換では、会員から、次のような意見が出されました。

・石井教育長の実践に基づいた講演は大変説得力があり、改めて教師という仕事の醍醐味を再確認することができました。石井教育長のお話は、教師塾本来の目的である、経験豊富な先生方の教育実践を引き継ぎ、これからの教育を担う教員の教師力を高めることにつながると思う。
・江口理事長からは、医療支援だけでなく、現在の日本の教育の課題についても、様々な角度からお話をいただいた。「使命感」という点では、医師も教師も共通する部分だと思った。
・今回は、「いのち」をテーマにした講座の企画であったが、どちらの講師も「人の人生に関わる仕事」に携わっていると思った。これからも、目の前にいる子どもの命や、夢や希望、思いや願いを守っていく実践を通じて、「いのち」を大切にしていく教育に取り組んでいきたい。

教育課題研究会では、今後も、しっかりと会員の資質向上を図っていきたいと思います。

（昭和63年　教育学部養護学校教員養成課程卒）

総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。
徳島大学総合科学部総務係　TEL：088－656－7103　FAX：088－656－7298
E-mail：sksoumk@tokushima-u.ac.jp

【総合科学部の１年】

平成30年(2018)９月～令和元年(2019)６月

＊平成31年２月15日（金）　公開シンポジウム
「観光まちづくりのための地域人材育成」を開催

徳島大学創立70周年記念事業の一環として、公開シンポジウム「観光まちづくりのための地域人材育成」を開催しました。第１部では四国４国立大学とＪＲ四国の連携事業「地域観光チャレンジ」2019中間報告会を行い、第２部では「観光まちづくりのための地域人材育成」の演題で、和歌山大学観光学部の出口竜也 教授に同学部の先進的な取組について紹介していただくと共に、JR四国・総合企画本部地域連携室、（一社）イースト徳島観光推進機構、（一社）徳島経済同友会・四国等連携推進委員会及び徳島大学総合科学部より、観光まちづくり人材育成に関わる４つの活動を紹介しました。

＊平成30年10月～令和元年６月
徳島大学総合科学部公開セミナーを開催

一般の方や大学生、高校生を対象とした市民講座である徳島大学総合科学部公開セミナー「人文知・社会知への誘い」を下記のとおり、開催しました。

平成30年（2018）

第16回 10月26日（金）　饗場　和彦 教授
「ホントーは怖い民主主義と立憲主義のはなし
～君は『ゆでガエル』になるのか～」

第17回 11月30日（金）　岸江　信介 教授
「近畿方言と四国方言の関連　～京阪方言の四国上陸と拡散～」

平成31年（2019）

第18回 １月25日（金）　村上　敬一 教授
「災害時の日本語を考える　～人間を支えることばとは～」

第19回 ２月22日（金）　井戸　慶治 教授
「シラーの詩“An die Freude”について　～第九の歌詞としてではなく～」

第20回 ３月29日（金）　平井　松午 教授
「地域研究とフィールドワーク　～『総合科学実践プロジェクト』実践例を通じて～」

第21回 ４月26日（金）
「異文化に照らし出された四国」
プロジェクトメンバー　（依岡　隆児 教授　ほか）
「異文化に照らし出された四国　～外国人ならびに国際的に活躍した四国出身者の残した文献の調査・研究から～」

第22回 ６月28日（金）　佐原　理 准教授
「iPhoneでみても地球は青かった　～DIY地球撮影の裏側～」

＊平成30年９月27日（木）・28日（金）
地域系大学・学部連携協議会に参加（青森県）

＊平成30年10月４日（木）・５日（金）
国立大学法人17大学人文系学部長会議への参加

埼玉大学教養学部主催により、第18回国立大学法人17大学人文系学部長会議がラフレさいたまで開催され、大学改革にともなう学部・大学院の改組の現状と今後の課題等について意見交換されました。

＊平成30年10月11日（木）　徳島大学びざん会の開催

徳島大学びざん会（同窓会連合会）がザ・グランドパレスで開催されました。

＊平成30年10月25日（木）
優秀学生（３年次学生）表彰式

学業成績が優秀な学部学生（３年次学生）に贈られる優秀学生表彰式があり、学部３年次の優秀学生８名を表彰しました。

＊平成30年11月15日（木）
学部長と学部学生との懇談会を開催

学生12名、教職員９名が参加し、学生委員長の司会により、事前アンケートで寄せられた質問・意見を中心に、学生からの質疑に答える形で行われました。

＊平成31年２月５日（火）　康楽賞贈与式の挙行

徳島大学の優秀な専任教員および学生を対象とした公益財団法人康楽会による康楽賞の贈呈式が、長井記念ホール（蔵本キャンパス）で挙行されました。総合科学部の受賞者は次の方々です。

〔教員の部〕　荒武　達朗 教授「近現代中国華北及び満洲における地域社会に関する研究 」

〔学生の部　学術研究関係〕
大学院総合科学教育部 博士前期課程　２年次
髙橋　優子
総合科学部４年次
久保　朱里、岸田　卓巳、船越祐理江

〔学生の部　奨学生関係〕
大学院総合科学教育部 博士前期課程　１年次
笹田　義弘
総合科学部４年次
田口　湧也、岸部　義礼、長田　正美

＊平成31年２月21日（木）
学長と学生との懇談会を開催

総合科学部からは学生３名（総合科学教育部１名、総合科学部２名）が出席しました。

＊平成31年２月27日（水）

教育部長と大学院学生との懇談会を開催

修了予定者４名、教職員８名が参加し、大学院教務・入試委員長の司会により、大学院生活、履修、修士論文、大学の設備などについての懇談が行われました。

＊平成31年３月22日（金）　平成30年度卒業式・修了式ならびに優秀学生表彰式の挙行

アスティとくしまで午前10時より挙行されました。午後には総合科学部において優秀学生表彰および大学院学位授与式が行われ、14時30分よりパークウェストンホテルで謝恩会が開催されました。学部卒業生は264名、大学院修了者は博士前期課程の地域科学専攻31名、臨床心理学専攻14名、博士後期課程地域科学専攻が１名。優秀学生表彰者の４年生は次の通りです。

〔人間文化学科〕　福良奈美、河原　剛、岡村美紀、長田正美、曽我部萌

〔社会創生学科〕　伊内優貴帆、田中智映、藤原隆己、髙市典子、久保朱理

〔総合理数学科〕　森　篤志、田口湧也、伊賀友輝

＊平成31年３月22日（金）　渭水会会長賞の授与

卒業式当日、12時40分より総合科学部第２会議室で、渭水会の濱尾巧久会長より、第５回渭水会会長賞として表彰状と賞金が受賞者に渡されました。詳細は渭水会々報記事（→P29）をご覧ください。

＊平成31年３月25日（月）

永年勤続退職者表彰式・祝賀会の挙行

＊平成31年４月１日（月）

平成31年度辞令交付式の挙行

徳島大学本部で野地澄晴学長より辞令交付が行われました。

＊平成31年４月５日（金）　平成31年度入学式の挙行

午前10時より、アスティとくしまで平成31年度徳島大学入学式が挙行されました。今年度は、新入生総代として総合科学部から佐藤優綾さんが選出され、「本学の教育方針に従って学則をまもり、学術の研究と人格の陶冶に努めることを誓います」と宣誓しました。同日午後には総合科学部で大学院オリエンテーションも行われました。入学者数は、総合科学部182名、大学院総合科学教育部博士前期課程36名、博士後期課程４名。

＊令和元年５月25日（土）　渭水会総会の開催

当日14時より総合科学部第１会議室で開催され、平成31年度の事業計画が承認されました。

＊令和元年６月28日（金）

平成30年度総合科学優秀賞受賞者表彰式の挙行

優れた研究成果を発表した総合科学部教員に対して贈られる総合科学優秀賞に山本哲也准教授が選出され、表彰式が行われました。研究テーマは、「地域創生・総合科学に関する研究」です。

【人事異動】

＊副学部長の紹介

総合科学部の副学部長（教育担当）に田島　俊郎 教授、副学部長（研究・大学院担当）に髙橋　晋一 教授、副学部長（グローバル化担当）に佐久間　亮 教授が選出されました。任期は平成31年４月１日～令和３年３月31日までの２年間。

＊コース長の紹介

総合科学部社会総合科学科の国際教養コース長に荒武 達朗 教授、心身健康コース長に三浦 哉 教授、公共政策コース長に饗場 和彦 教授、地域創生コース長に平木 美鶴 教授が選出されました。任期は平成31年４月１日～令和３年３月31日までの２年間。

＊名誉教授の就任

平成31年３月31日付で退職された次の教員が徳島大学名誉教授となられました。いずれも長きにわたって総合科学部などで教育研究活動に携わっていただきました。篤く御礼申し上げます。

（　　）内は徳島大学での在職年数。

葭森　健介 教授（33年）
玉　真之介 教授（７年６ヵ月）
岸江　信介 教授（19年）
平井　松午 教授（37年）

＊教職員の異動

平成31年３月31日付で、次の教員が退職されました。

葭森　健介 教授（中国史）
上岡　義典 教授（教育福祉心理学）
玉　真之介 教授（地域経済研究）
岸江　信介 教授（社会言語学）
平井　松午 教授（歴史地理学）
田中　智行 准教授（中国古典文学）

平成31年４月１日付で、次の事務職員が着任されました。

福川　利夫 氏（事務課長）
木南　麻衣 氏（総務係事務員）
藤岡　史帆 氏（総務係事務員）
米原えりか 氏（学務係事務員）

＊新任教員の着任

平成30年９月１日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

津村　秀樹 講師（学習心理学）

平成30年10月１日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

山本　哲也 准教授（人格心理学）

平成31年４月１日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

横谷　謙次 准教授（家族心理学）
甲田　宗良 講師（産業心理学）

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報ならびに本学ＨＰをご覧ください。
また、徳島大学同窓会連合会のFacebook（https://www.facebook.com/bizankai/）では、
徳島大学の情報をよりリアルタイムでお届けします。ぜひ、「いいね！」よろしくお願いします。

＜徳島大学総務部総務課＞
TEL：088－656－9979　FAX：088－656－7012　URL：https://www.tokushima-u.ac.jp/

Facebook

1　徳島大学は創立70周年を迎えます

1949年に創立した徳島大学は、本年11月に創立70周年を迎えます。

創立70周年にあたり、記念事業として、記念講演会や美術展、Home Coming Day、創立70周年記念大学祭などを開催します。記念美術展では、本学総合科学部の芸術系教員や活躍している卒業生・在学生が、内容を入れ替えながら様々なジャンルの展示を行っております。是非、ご来場下さい。

創立70周年記念事業へのご支援に厚く御礼申し上げます。引き続き、ご支援賜りますようお願いいたします。

記念事業の詳細は、本学HPをご覧下さい。
https://www.tokushima-u.ac.jp/about/anniversary_70th/anniversary_70th/

2　平成31年度入学式を挙行しました

平成31年４月５日、アスティとくしまで平成31年度入学式を挙行し、合計1,895名の入学が許可されました。

入学生を代表し、総合科学部の佐藤優綾さんから「本学の教育方針に従って学則をまもり、学術の研究と人格の陶冶に努めることを誓います」と宣誓がありました。

3　財務省四国財務局と連携・協力に関する協定を締結

平成31年１月11日本学事務局において、本学と財務省四国財務局の間で、地域経済・社会へ貢献することを目的とする協定を締結しました。

四国財務局徳島財務事務所による本学学生のインターンシップ受入、同事務所所長による本学総合科学部の授業において講義の実施等、近年関係を深めていることから改めて協定を締結し、組織対組織としての関係を明確にすることにより、今後さらなる連携の拡大・強化を図ることを目的として今回の協定の締結にいたりました。今後は、地域経済の活性化、地域経済の活性化等に寄与できる人材の育成等に連携して取り組みます。

徳島大学基金へのご協力のお願い

「徳島大学基金」は、皆さまから事業区分ごとにご支援いただいた寄附金を基金として積み立て、徳島大学の教育研究等の発展のために使用させていただくものです。webサイトからクレジットカードやコンビニを利用したお申し込みも可能となりました。

●**創立70周年記念事業基金**
2019年に迎える創立70周年の記念事業へのご支援

●**教育・研究・社会貢献事業基金**
プロジェクト事業や全学的な教育・研究、管理運営、環境整備などへのご支援

●**国際交流・グローバル化事業基金**
留学、教員の海外派遣など、国際交流事業へのご支援

●**修学支援事業基金**
授業料等の免除など、学生の修学へのご支援

●**学部等支援基金**
各学部、先端酵素学研究所の教育・研究や管理運営、環境整備へのご支援

●**古本募金**　https://www.furuhon-bokin.jp/tokushima-u/
不要になった本、CD、DVDを寄贈いただき、買取金額を基金に充てます

詳しくは徳島大学基金ホームページ（https://www.tokushima-u.ac.jp/contribution/）をご覧ください。

●基金に関するお問合せ
徳島大学基金事務局
（担当：総務部総務課）
TEL. 088-656-9981

●申込手続き、税制上の優遇措置に関するお問合せ
徳島大学財務部資産管理課
TEL. 088-656-7037

事務局だより

●助成事業の申し込みについて

助成事業の要項に該当する事業をご計画の会員がおられましたら、お申し込みください。P45の申請書をコピーしてお使いください。事務局にご連絡いただければ、様式（Word形式）をお送りします。お問い合わせ・お申し込みについては事務局までお願いいたします。

●異動届のお願い

会員相互の親睦等同窓会活動に、また、会報のお届けにと名簿は、渭水会にとって、重要な財産のひとつです。名簿の整備には、鋭意努力しておりますが会員の皆様方のご協力が不可欠です。

現在、転居等により会報をお届けできていない会員も多数おられます。お手数ですが異動等ございましたらその都度事務局までお知らせいただければ幸いです。

会員数も膨大になり同姓同名の会員もおられます。誤記を避けるためにも、卒業（修了）年、課程（学科）、専攻（コース）、旧姓を記載いただき、できるだけ文書・ファックス・メールにてお知らせくださいますようお願いいたします。

●終身会員の募集についてのお願い

渭水会では、昭和54年入学生より終身会費制になりましたが、まだご存じない方がおられます。同窓会の折に渭水会の組織・事業等をお話いただき終身会員になってくださるようお勧めいただければ幸いに存じます。終身会員には会報が郵送されます。

終身会費納付額

卒業（修了）年	納付額
昭和21年以前	4,500円
22～27	7,500円
28～33	10,500円
34～39	13,500円
40～45	16,500円
46～51	19,500円
52～57	22,500円

郵便振替口座番号　01610−1−21392
加入者名　徳島大学渭水会

なお、会報がお手元に届いている方は、すでに終身会員ですが、ご自分が終身会員かどうか分からない方は、事務局までお問い合わせください。

渭水会事務局

事務局は総合科学部１号館北棟１階入り口すぐ（部屋番号１N01）です。
業務時間および連絡方法は、以下の通りです。
時間／水曜日 13：30～17：00
（祝祭日および大学の休業日は除く）
TEL 088－656－7293（月～金 10：00～17：00）
FAX 088－679－8485
E-mail info@isuikai.jp
URL http://www.isuikai.jp

編・集・後・記

●１学科４コースとして再出発した総合科学部も早、４年目。今年度、初めての卒業生が誕生します。
また来年度から常三島地区の大学院が、「総合科学部」、「理工学部」、「生物資源産業学部」に接続する大学院 創成科学研究科として生まれ変わることになりました。
渭水会々報では、様々に変化する学内において、変わらず頑張っている後輩の様子もお届けできればと思います。（U3）

●10年ほど前になるでしょうか。吉野川源流の碑を訪ねたことがあります。森の案内人に導かれ、原生林を２時間ほどトレッキング。紅葉に輝く原生林に抱かれて、静かに碑は佇んでいました。そこにたどり着いた人だけが見ることのできる風景……今回、念願叶って、皆様にご紹介することができました。

●徳島大学創立70周年記念事業のホームカミングデーが近づいてきました。青春時代を過ごした常三島キャンパスで、楽しいひとときを過ごしていただければと思います。「同窓会in学食」もまだまだ席がございます！ふるってご参加ください！（ね）

発行所／徳島大学渭水会・〒770-8502 徳島市南常三島1丁目・徳島大学総合科学部内・TEL 088-656-7293 FAX 088-679-8485
印刷所／株式会社坂東印刷・〒776-0001 徳島県吉野川市鴨島町牛島3043・TEL 0883-24-2234
発行日／2019年（令和元年）10月１日

同窓会 in 学食　参加申込書

令和元年　　月　　日

団体・グループ名	
参 加 人 数	名

代 表 者（幹事）

代表者氏名		卒業年月　T. S. H.　　年　　月
住　　所	〒	
連　絡　先	TEL　　-　　-　　FAX　　-　　-	
	携帯電話　　-　　-	
	E-mail	
通信欄（連絡事項などあればお書きください）		

●団体・グループの代表者（幹事）の方は、ご記入の上、下記事務局まで
郵便、あるいはメールでお申込ください。
●申込書を受け付けましたら、事務局より振込用紙と参加者名簿のフォームをお送りします。
10 月 21 日(月)までに会費をお振込みください。

お申込み・お問合せ先　渭水会事務局
〒770-8502　徳島市南常三島町1丁目1番地　徳島大学総合科学部内
TEL 088-656-7293　　携帯 090-2824-5006（事務局　大井）
E-mail　info@isuikai.jp

ユーカリの花（総合科学部キャンパスにて）